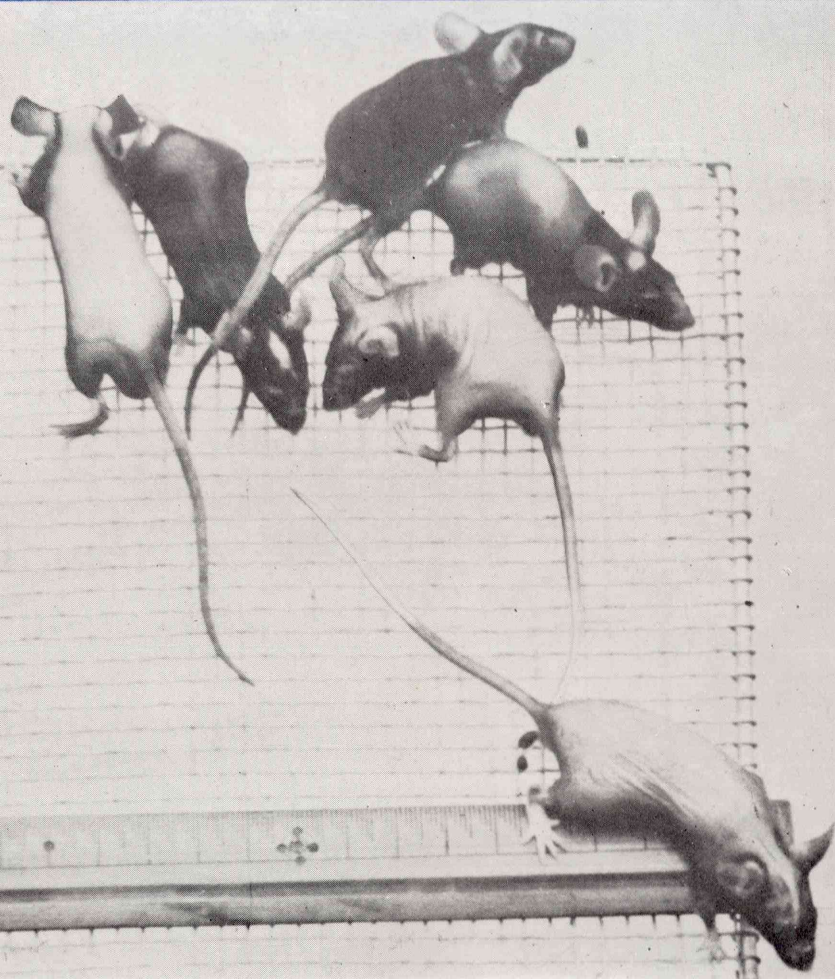


# 創立5周年



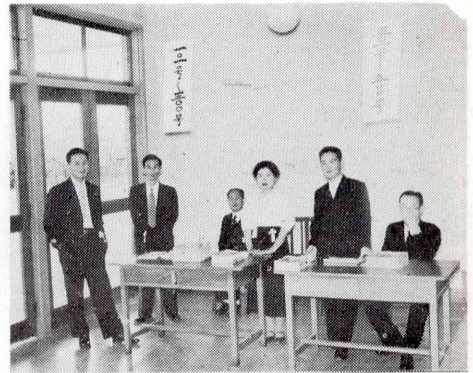
国立遺伝学研究所

1954

## 目 次

○	創立5周年記念アルバム	
I	創立5周年を迎えて	1
II	式 辞	3
III	祝 辞	13
IV	祝 電	22
V	創立5周年記念式概要	24
VI	研究のあゆみ	33
VII	開所式に拾う	39

国立遺伝学研究所  
5周年  
記念アルバム



(1) 来客をまつ所員 (正面玄関所見)



(2) 来客ぞくぞく到着 (その1)



(3) 全 (その2)

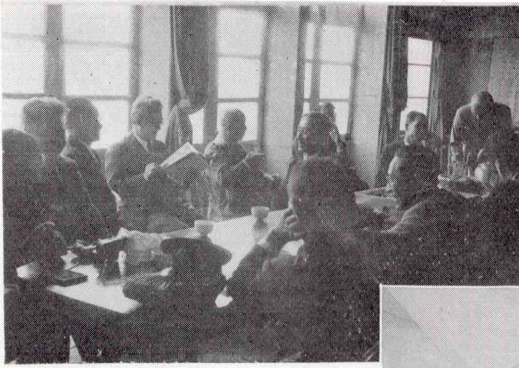


(4) 全 (その3)

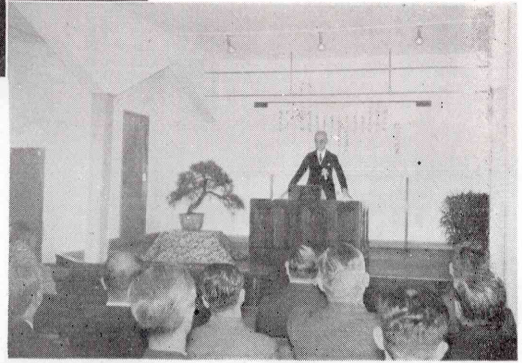


(5) 全 (その4)

2. 開 所 式 典



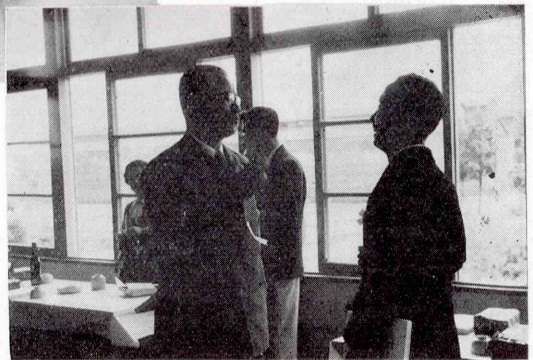
(6) しばし休憩



(7) 所長式辞



(8) 式 場



(9) 祝宴場へ



(10) 祝宴場風景 1

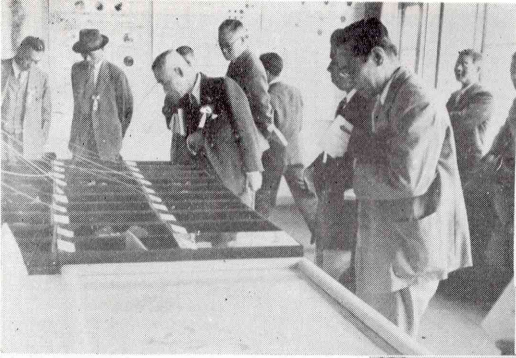


(11) 祝宴場風景 2

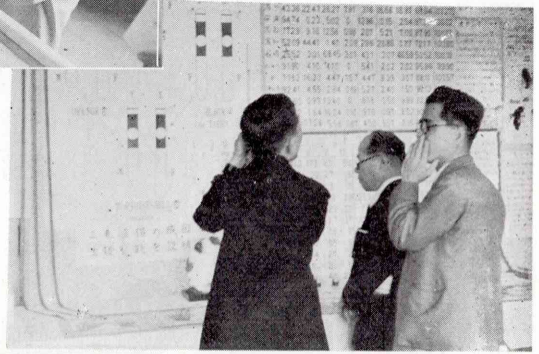


(12) よろこびに充てる祝宴場全景

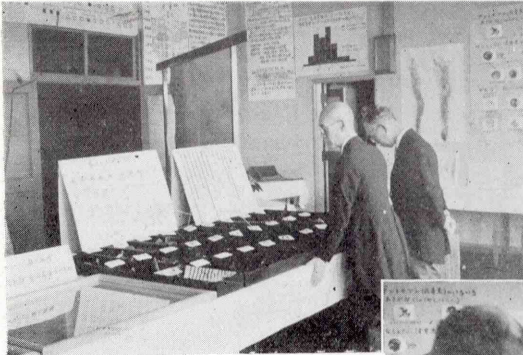
4. 所内見學,陳列展覽



(13) 展覽室



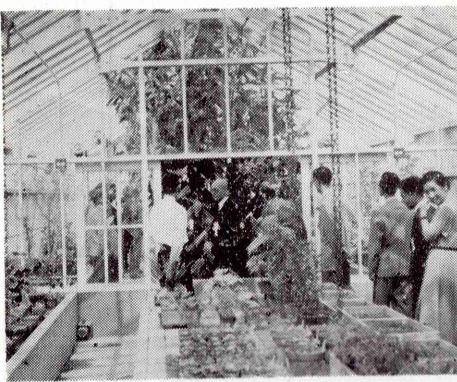
(14) 説明をする駒井博士



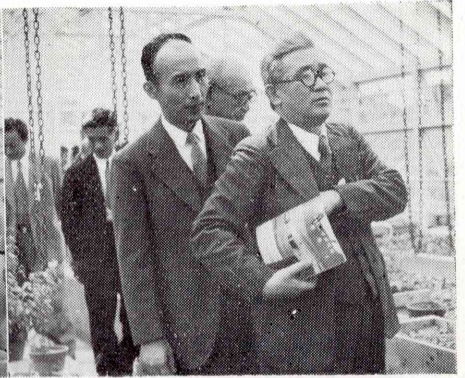
(15) 展覽室における所長(左)と  
田中博士



(16) 展覽室



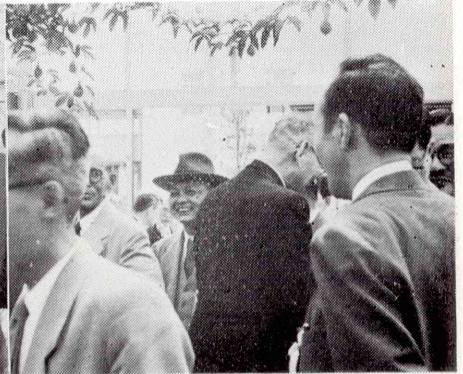
(17) 温室にて



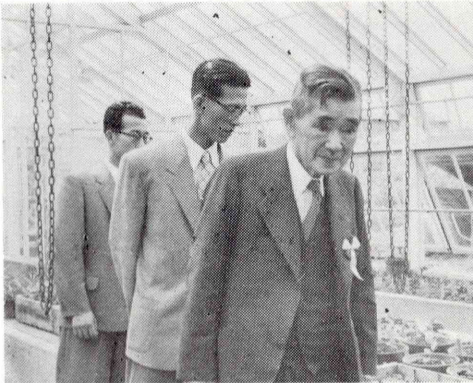
(18) 全



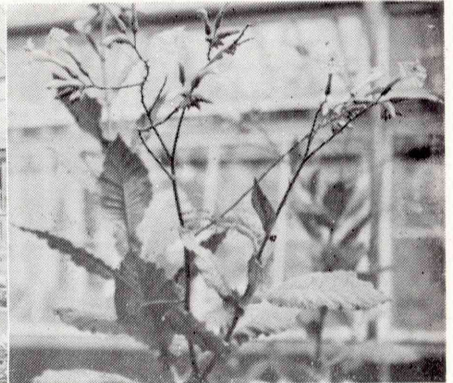
(19) 全



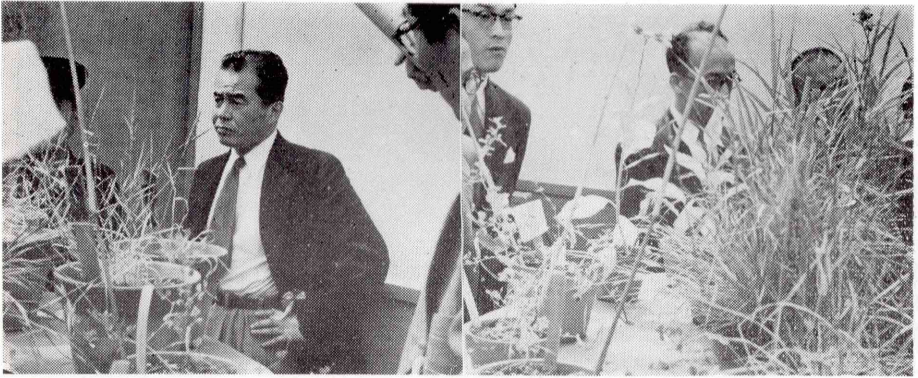
(20) 全



(21) 全

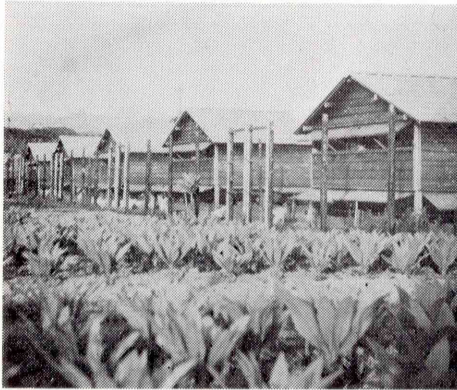


(22) 温室内のタバコの花

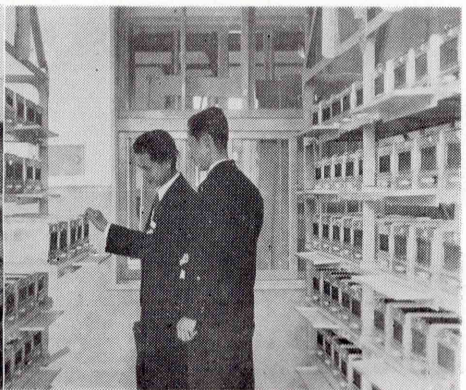


(23) 調節温室にて

(24) 全



(25) 鶏 舎



(26) ネズミ飼育室にて

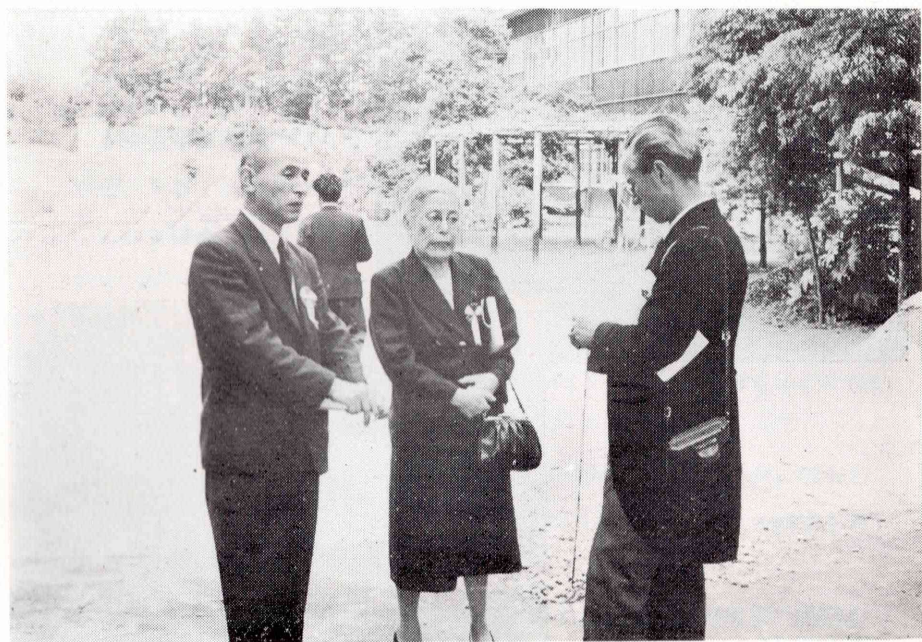


(27) 所内見學風景



(28) 全

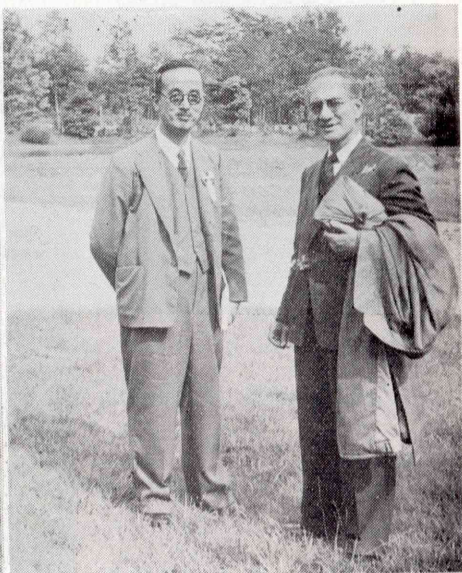




(29) 語らい



(30) 玄関前芝生でのしばし小憩の來賓



(31) 久しぶりですね

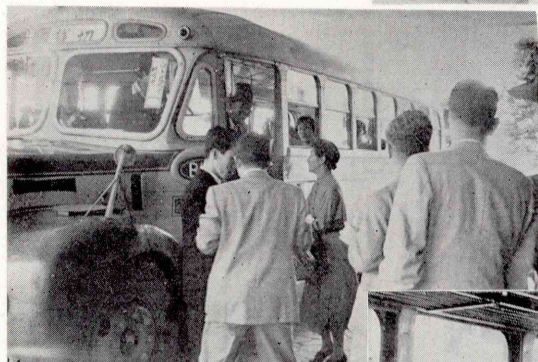
8. 懇親会場へ



(32) バスが参りました



(33) バス到着



(34) バスに乗車



(35) バスにて懇親会場へ

# I 創立5周年を迎えて

本研究所以昭和24年6月1日国立遺伝学研究所として、発足してから昭和29年6月1日をもつて5周年の日を迎えることになつた。

これを機会に創立5周年記念式を挙行するとともに、開設の紹介を行うため、研究所設立請願人及び関係者、官界、学界、地方名士を招待し臨席を願つた。

当日はその前日からの雨もからりと晴れわたり、記念式を寿ぐかの如く富士の姿もくつきりと青空に聳えていた。

記念式は午前11時半から設立請願人、設立関係者、官界、学会、地方名士多数の参列を得て国立遺伝学研究所講堂で行われた。広い第一講堂も満員の盛況であつた。

まず乙藤庶務部長の司会で開会が宣せられた。次いで小熊所長の式辞は国立の遺伝学研究所の必要が叫ばれだした時代から開所に至るまでの経過と研究所の現況について、1時間余に亘り、詳細な辞が述べられた。その式辞には遺伝学会の長老としての苦心の跡がしのばれ、聞くものをして感動せしめた。

次いで拍手に迎えられて、文部大臣、農林大臣、日本学術会議会長、文部省直轄機関代表、静岡県知事、静岡県議会議長、三島市長、日本遺伝学会会長等から、次々と厚情のあふれた激励や称讃の祝辞が述べられた。そのあと各方面からの祝電の披露が行われて式を終つた。

引きつづき別室において祝宴が催され、祝盃をかたむけながらも各自思い思いに研究所の創立までの苦心や思い出話に花をさかせ、如何に創立に到るまでに苦勞が払われたかということが、なごやかな雰囲気の中にもしのばれた。大杉静岡大学長の発声で乾盃、つづいて研究所万才の声は祝宴場にあふれた。

祝宴が終つて見学係の案内で来賓を三つの班に分けて所内見学が行われ

た。

陳列室は研究者の苦心した貴重な研究資料が室内一ぱいに列べられ、見る人をして眼をおどろかせた。

ゴルトシュミット文庫、電子顕微鏡室、X線室、恒温室、ショウジョウバエ飼育室、調節温室、ネズミ飼育室等の最新の設備と設計に驚き、且つ、遺伝学の領域の如何に深遠であるかと言うことを知り、これらの設備を用いて素晴らしい研究の成果を望みつつ、係員の説明に耳をかたむけた。又遺伝学者の間には訪れる度毎に設備と内容とが整備されていることに驚き、且つ羨望の声をもらしている人も見受けられた。

見学は終つても、なお三々五々、久し振りに巡り会つた設立関係者の間には、当時の懐旧談に時のたつのも忘れたかの如く、芝生の上に座したり、記念の写真を撮つたり、木蔭に憩いながら語りあつている場面も、あちこちに見受けられた。

記念式のすべての行事も盛会のうちに滞りなく終えることを得たことは、所長をはじめ所員一同欣快に堪えないところである。

ここに所長式辞、来賓祝辞等を中心として、その経過と状況を記録し後日の参考と思ひ出の資とするものである。

## Ⅱ 式 辞

国立遺伝学研究所長 小 熊 捍

本日、国立遺伝学研究所の創立5周年を迎えるに際し、かくも多数の来賓をむかえて祝賀の式典を挙げることの出来ましたことは、我々にとり誠に光栄であると共に感謝に堪えない次第であります。

由来、新しい機関が創設せられその事業が開始されます時には、必ず先ず開設の式典を挙げるのが慣例とされて居ります。この点に於いて本研究所はいささか趣を異にし、我々は5年を経過した今日迄遂にその期を得ずに通したのであります。それには一つの理由がありまして詳しくは後で御了解のことと思いますが、要するに、創立臨時費を持たずに出発しましたので、遂にその運びに到らなかつたのであります。従つて今日は創立5年を祝賀する式ではありますが、同時に本研究所を紹介する開所式を兼ねた企であるということをも、御了解願いたいのであります。

そもそも、我々が国立の遺伝学研究所をつくり、ここに遺伝に関する各分野の知能を集め、生物の生活現象の中で一見神秘とまで思われるような遺伝に就て、その理論を究め、更に応用の面を研究し、小にしては日本の、大にしては広く人類の幸福を増し度いという念願を持つて日本遺伝学会の中に研究所創立委員会をつくつたのは、昭和15年のことでありました。

当時、日本の国は漸く人口と食糧のアンバランスが目立つようになり、その解決策として戦争を賭けてまで国外に足を伸ばし始めた時であります。人口の過剰は著しく目立つようになり、人口政策が市井の日常の話題になる有様でありました。その一つの対策として、優生法案が議会で論議されるようになったのは、この時であります。遺伝性の悪質を国民から追い出すというこの法案は、民族の質ということを考えれば必要であります。しかしながら当時に於ける人間の遺伝に関する論拠は、なお甚だ薄弱な、且

つ不確実なものでありました。法案よりも研究が先行さるべきだと我々は考えたのであります。民族から悪い形質を除くことの必要と並んで、民族のもつ優良な形質は積極的に育てねばなりません。従つて、民族の将来を考えるときには、先ず、遺伝という現象が人間に於てどういふ風に現われるものかを確立しなければなりません。その上にこそ権威ある法律が生れてくる筈です。我々はこのことをこの際痛切に感じたのであります。最近、人間の遺伝学は、急激に進歩しました数字の巧なる利用によつて、実験の出来ない場合でも正確に遺伝の現れ方が、次第に判明しつつあります。最近の国際遺伝学会に於ても人類遺伝学の研究発表は、実に夥しい数に上つて居ります。優性問題はやがて人口問題に直結して来ます。従つて遺伝の研究は日本に於てこそ、強力に進めねばならぬ重要な問題であります。

人口問題に直接結びついている大きな問題に食糧問題があります。又、これに附随して各種工業の原料の増産も問題となります。現在の作物が何れも祖先の遺産として残された優良なものであることは間違いないとしても、我々の知識は更に改良を加えて、一層良質にして生産量の多いものを作りつつあります。かかる育種の方法に於て、遺伝学の演ずる役割は誠に大きなものがあります。或る特定の品種を選んで作った雑種第一代は、雑種強勢という現象を現しますが、これを利用して驚く可き増産を挙げることや、病原菌に対する抵抗性を利用して病気に罹らぬ品種を作ることや、人為的に遺伝子の集りである染色体に変化を起さしめることや、或は又、放射能を利用して遺伝性ある優良品種を作り出すことや、我々が直に着手しなければならぬこれらの問題は、総て遺伝学の裏付けがあつてこそ初めて有効になつてくるのであります。

この様に考えて居りますと、当時、日本遺伝学会が研究所を創つて、日本の直面して居るこれ等の問題を解決したいと思つたのは、学徒の考えとしても極めて当然のことです。その上、遺伝学は、自然科学界に於ては原子物理学と並んだ若い学問でありまして、しかも短期間の中におどろくべき進歩を遂げた学問であります。その上取り扱ふものが複雑なる生活現象であるのでその学理究明には、単なる生物学方法の他に数学、物理

学及び化学の方面から歩調を併せて行くことが、絶対不可欠となつて来たのであります。従つて、これ等自然科学の各分野に於ける知能が一堂に集められれば、その総合された中心に遺伝現象を置くことによつて、恐らく飛躍的に見事な成績が挙げられると信じます。これは大学に講座を増すというようなこととは、根本的に意味が違ふのであります。日本遺伝学会の意は、全くここに在つたのであります。

しかしながら、ことは容易に成熟しませんでした。そこで、日本學術振興会の内に遺伝に関する特別委員会を創り、研究所の出来る迄でも遺伝に関して強力なる研究陣を張ることになりました。第四特別委員会がそれです。この委員会は學術振興会の助力によりまして、日本の遺伝学者が総合的に研究を行い多くの成果を挙げて居ります。この特別委員会は研究を促進する目的のものであつて、研究所設立の運動は依然として、創立委員会によつて続けられました。しかし、戦争は益々はげしくなり、交通も次第に危険となり、自然この運動も不活潑にならざるを得なくなつたのであります。

昭和20年終に日本が降伏して戦争は終わりました。そして日本は将来、戦争を放棄していわゆる文化国家としてスタートすることになりました。そこで、国立遺伝学研究所創設の機運が来たものと信じ、改めて日本遺伝学会は、遺伝学研究所設立準備委員なるものを創り、当時の文部大臣(田中)に設置方を依頼するのを手始めとして、あらゆる面に新しく活動を開始したのであります。当時の日本は、敗戦の直後とて人心も極めて不安、国家財政も極めて緊迫し、加うるに占領軍の圧力甚だ大きく、総ての面に於て我々の意図は容易に達せられるとは思いませんでした。そこで、次善の策として、先ず民間の研究団体を作り、政府が補助金を出して研究を進めるということが考えられ、ここに財団法人遺伝学研究所の設立を見たとあります。この法人設立に就ては、中央馬事会から20万円の寄贈を受けこれを基金とし、研究費は文部省から助成金として出して貰うことになつたのであります。この法人は事務所を山階鳥類研究所に置き、とりあえず各地の国立大学にその分室を配置して、研究を進めることになりました。昭和

22年の4月のことです。元よりこの財団設立は飽く迄次善の策でありまして、我々は国立の研究所設置運動の手を決してゆるめは致しません。昭和22年の9月、遂に文部省の省議が決定し、創立予算1億円、3カ年継続として初年度5千万円の予算が計上されました。残念なことに、翌23年4月10日の閣議に於て国立遺伝研の予算は、不採択と決りました。当時の文部大臣は、現広島大学長森戸辰男氏であります。この際の我々の失望はどんなでありましたろう。我々は設立準備委員は即刻、森戸文部大臣を訪ね政府に再考を求めました。そして色々折衝の末、最小限度の予算を以て出発することに決め再び閣議に咨かることに了解を得、遂に閣議を通過して7月5日に国立遺伝学研究所の予算は議會を通過したのであります。この間に於ける森戸文相以下、文部省の諸君、並に大蔵省の関係官諸氏の努力に対しては、誠に感謝の辞がありません。この際政府の支出する金額は極めて小額のものに過ぎないことは明かですが、国家の財政困難の際に於て、国家百年の前途を見つめながら、この研究所を新設したことは、日本の文化史の上に輝しい足跡を印したことだと信じて居ります。

しかし乍ら、まだ一つ面倒な問題が残されていました。それは設置法案が改めて国会の承認を得なければならないことです。先きに話した様に日本は占領下にあります。事々に占領軍の賛成を得なければなりません。これに就ても、我々は予算以上に苦心をしたことを、今も決して忘れることが出来ないのであります。幸にして当時、文部省の茅局長と司令部のケリー博士とが数多い障害を排して事を円満に解決して行かれたので、遂に設置法案も議會を通過し、昭和24年5月31日に法律第146号を以て文部省設置法が公布せられ、ここに我々多年の宿望が実現されるに至つたのであります。国立の研究所ができました上は、財団法人の研究所は当然解消されるべきでありまして、この財団は以来、遺伝学普及会と名を更め、本研究所の外郭より各種の点で研究所を援助し、一方遺伝学を一般社会に普及するための事業を始めることになつたのであります。

以上のような経過を以て研究所はできましたが、次に来るべき問題はそのあるべき位置であります。この点に就ては、すでに財団法人の研究所が



できたときから我々はそれを研究しておつたのであります。そして、それには三つの条件が必要でありました。その一つは場所です。研究所の所在地は寒地でも酷暑の地でも不適當です。試験圃場の利用期間が短くなるからです。この点で湘南地方から西は静岡までが先ず選ばれました。その二は既設の建物があることです。新営の予算がないからです。そしてその三は、建物に直結した相当広い耕地があることです。これら三点を満足するような所を探しました。そして遂に現在の所が決定されたので、これを現在のように使用する迄には、また、甚だ多くの方々の御援助を仰いだことでありました。中に、今は故人となつた前三島町長花島周一氏を決して忘れることができません。この土地は誠に日本でも有数なる景勝地であり、気候もよろしく、空気は清浄で雑音も少なく、作物を試育し、動物を飼育するのに好適であるのみならず、思索の上にも得難い環境であることが過去5年の経験で明かに立証せられ、一同非常に満足して居る有様であります。

以上述べました様に、創立はしたものの、創立臨時費を全く持たないでこの建物に入り、事業を開始したのでありますから、過去の5年というものは、云わば総てを設備の完備に費したといつても過言ではない様であります。研究所のスタッフは元より、このことを覚悟して研究費はできるだけ他より貰つてくるという努力をして、協力一致、設備の充実をはかつてきました。創立の当初、我々は先ず文部省に小さい部屋を一つ借りまして、それを事務所として辛うじて創設百般の事務をとつて居ました。その間に現在の建物入手の話合いが成立して、昭和24年12月1日に三島へ移つて参りました。我々がここに移つてきた当時に於けるこの本館の姿はどうでありましたろう？ 成程、床面積は広い、それに並んで立つて居る別棟の工場に比べると、新しくて立派でもあります。ところが元來が研究所としてできたものでもないし、又戦争末期の建築であれば当然のことではあります。構造の脆弱なことには、一同失望の念の深いものがありました。天井の漆食いはところどころ浮き上つて居つて既に落ちたところもあります。二階の天井は全部取り払られて吹き抜きです。戦争の名残であります。

す。それに床が弱くて机上に置いた顕微鏡が廊下を歩く人の震動によつて、正確な像を結んでくれないのです。その上、電力は辛じて灯火用のみであるし、瓦斯、水道のような基本的の設備が全くありません。これでは如何に研究者の意気が旺盛でも、本格的な研究などは思いもよりません。我々は先ずこの様な根本的な施設から完備して行かねばならなかつたのです。

丁度この様な現状のときに、ゴルトシュミット博士の文庫を譲り受ける話が起りました。同博士は現代遺伝学の黎明期より世界学界の陣頭に立つて輝かしい遺伝学の体系を築いた学者の一人であり、又政府の招きによつて日本にも3回来朝し、日本に於て遺伝学が長足の進歩を遂げたことも、同博士に負うところがすこぶる多いのであります。その博士の文庫は恐らく世界の何れの国の学者にでも大きな価値を認められていたものに異いありません。それを入手する機会を得たということは同博士が本研究所の創立に大きな期待をかけたからに他なりません。幸にも、政府が多くの外貨を特に提供してくれましたので、この最も貴重なる文献を入手することができたのですが、この貴重なる文庫を容れる安全な不燃質の建物がないのです。ついで、電子顕微鏡を入手しました。しかし、それを据えつける頑丈な床がありません。更に、レントゲンの器械を入れましたが、矢張り同様であります。丁度その頃、静岡県知事をされていた小林武治氏が見えて、我々の苦境を見るに忍びず、直に県会に咨つてこれ等を安全に火災より保護し、研究を能率的にするため、鉄筋の本建築を新築提供されることになりました。次でこの事業は次期の斉藤知事に受けつがれ、遂に今日見るように立派に完成されるにいたりました。この際、両知事、並びに県民にたいし、心から感謝の意を表す次第であります。この不燃の建物は我々に非常な安心感を与えると同時に、重量の多い器械の据え付けも理想的に行われるため、研究の面に於ても極めて正確、且つ能率が高められるのは当然であります。しかもこれが誘い水のような役目をも果して、今度はそれに接続して国費の増築ができましたことは、全く二重の喜びであるといわねばなりません。勿論まだ床面積は小さいものですが、そこに我々は生化学

に関する低温室等を持つことができたのであります。毎年文部省が科学研究費として大学、研究所に出している金は相当の額に上つておりますが、本研究所も、亦その恩恵に浴し、最近完成した調節温室と鼠飼育室などはその主なるものです。何れも最新の設備と設計とによつて建てられ、一般にモデル設備とまで言われております。この間、瓦斯と水道、それに電力も迂余曲折はありましたが、28年度の末までに全部完成し、ここに始めて研究所としての基本設備ができ上つたわけであります。又一方、研究所の敷地には、前の所有者である富士産業会社の工場一棟が恐しく広い地積を占めて容易に取りはらいにならず、少なからず困つておりました。しかし、これも昨年の末に取りこわされ、その広い地面が研究用に役立つようになり、ここに始めて自己所有の土地の全面積を計画的に使用し得るようになりました。

以上は過去の5年を顧みて、無一物から出発した研究所が今日迄に確保し得た研究設備の大要であります。次に研究陣発展の跡をたどつてみましょう。創立の際、我々は10部門を持つところの理想的な構想を持つて居りました。ところが政府は初年度に3部門で出発するように予算の編成をなし、残りは毎年漸増の方針をとつたのであります。我々としてこれは不満には違いあません。しかし、日本の財政面から見て無理からぬことと思ひ、我々は喜んでこの3部門構成で出発したのであります。3部門とは形質遺伝部、細胞遺伝部及び生理遺伝部であります。しかるに翌年もその翌年も新しい部門は全然認められず、結局4年間というものは始めのまま据え置きという状態になつたのであります。研究部門がそのままであると云つても研究の範囲を何時迄も3部門特有の範囲に限つて居つたのでは到底所期の目的を達することはできません。まして本研究所設立に対する我々の根本的理念である総合研究の実が上る筈もないのであります。従つて我々は部門の構成形式は3部門としても、その内容に於ては必要と認める研究分野の人を既成部門に配置せざるを得ないのであります。この苦しい4年が過ぎて5年目に入るに及びまして、ここに初めて新しい部門が増設されました。生化学遺伝部がそれであります。次で本年度には応用遺伝部が

加わり、本日第5周年記念に当り漸く5部門の構成ができ上りましたことはともかく我々の喜びに堪えない次第であります。理想としては更に5部門が残されているわけで、この完成を目ざして我々は一層の努力をいたさねばなりません。特に最近、水素爆弾の実験からみても放射線遺伝の部門はあらゆる観点からしても早急に新設さるべきものであると信じます。研究員の数は勿論、研究部門の数に依存しますから創立当初から第4年目迄は、16人を出ることができませんでした。従つて研究内容から見て一人二役というような無理をする人が多くなり、部門増加の実現が急を要するようになったのは自然の勢だと見ねばなりません。この際生化学遺伝部の増設により4人を、更に応用遺伝部の増設により4人を増し、ここに定員が24名となり若干の補助員を加えて研究面は著るしく強力になつてきました。誠に喜びに堪えないところであります。

以上の如く、設備の点でも、人員の点でも、過去の5年間は主力をその充実に向けねばならなかつたので、研究そのものは非常な苦境に置かれていたことは否めません。それにしても各研究員は一同精魂をつくして研究を続けてきました。それは次の業績を見れば明らかであります。即ち著書として刊行されたもの28篇、論文として内外の雑誌に発表されたもの実に145篇に達しております。勿論、これ等は発行済みの分であつて、目下印刷中のものは含まれておりません。本研究所は創立と殆ど同時に、いち早く世界によびかけて我々の熱意と構想とを伝え、あらゆる面での援助と協力とを要望したのであります。このアナウンスメントは世界中の遺伝関係の機関に送られました。この企は各国で意外な反響を呼び、多くの学者から好意ある通信や、激励の手紙を数多く受けとつたのであります。その実例の一つは、先に御話したゴルトシュミット先生の図書であります。同先生は我々のアナウンスメントを読み、その構成人に多くの有能学者を認めたるが故にその蔵書の永久の所蔵を我々に図つてこられたのであります。この声明書は、まだ一篇の報告文書は元より、ガス、水道の如き基本設備さえ無き創立当初に発表したにもかかわらず、世界の学者が如何にこの研究所創立に深い関心を持つたかは、相ついで研究所を訪れる各国の遺伝学

者の名前からも、又その数からも証明することが出来ます。

先ず訪れたのがマラー博士です。マラー博士はX線により突然変異を誘発した研究により、ノーベル賞を授与された米国インディアナ大学の教授であります。博士は印度に講演に招かれて行つた際、わざわざ寄り道をして訪問されたのです。次にH・H・ブルー博士は、米国原子力委員会の医学生物学部長ですが、広島ABCCに連絡のため来日してわずかの時をさいて来所されました。又K・ラミア博士は印度に於て、稲の育種に就て大きな貢献をした遺伝学者ですが、先般一日を研究所に寄られ、所員と研究上の討議をして帰られました。又ポーランド出身の遺伝学者で目下、ジャバのユネスコ事務局に居るウォルスキー博士は特に一日をさいて訪問され、最近には英国ケンブリッジ大学の名誉教授ゲーツ博士の訪問を受け、細胞遺伝学に関する講演を聞くことができました。その他、印度の遺伝学者パルササラシー博士、オハイオ大学教授グリーン博士等枚挙に暇のない程であります。

我々が研究から得たところのものは当然世界に公表しなければなりません。又一方、国内にもそれを充分熟知させる必要があります。そこでとりあえず2種の定期刊行物を出すことにして居ります。その一は英文で書かれたアンニユアル・リポートでありまして年一回定期的に発行し、全世界の関係機関に送つて居ります。本年第4号を目下準備中であります。又その一つは日本語で編集した研究所年報でありまして、日本国内に広く配布して居り、今月その第4号が発行されたところであります。この2種の印刷物の他に別の形態で研究業績を発表する報告書を出す必要もあるかと考えて居りますが、総てが国際的に成りつつある現状からみて、当然それは国際性を持つたものでなければ意味をなしませんから、目下考慮中に属して居るといふ範囲を出て居りません。

この研究所が創設されました時に、いち早く専売公社からタバコの遺伝に関する研究の委嘱がありました。我々は熟考の上これを引き受けることとして爾来、引き続きその仕事をやつて居ります。又3年前に日本の民間養鶏家が出資して社団法人全国種鶏遺伝研究会を組織してその研究一切を

本研究所に委任して居ります。

本研究所が過去5年間に歩いて来た道の大筋は大体以上のようなものであります。大方の諸君が己に推察されるように、この道は決して坦々たる大道ではありませんでした。否むしろ切り開くには余りに抵抗の多い茨の道であつたとも云えるでありましょう。唯創立の初めからこのことを充分覚悟して居りました所員一同は、心を合せてこの道を拓いてきたのであります。そして漸く今、基本的な設備が整いましたので、この設備の上に立つて一層本格的な研究態勢をとり得る様になつたのであります。5周年の式典を開所の式典と考へてもよいという理由もここにあるのであります。昭和15年日本遺伝学会が総合研究所の設立を思いつてから、数えまして実に15年の歳月が流れてしまいました。ローマは一日にして成らずの感が泌々と味われる次第であります。この間におきましてこの研究所のために働いた方々は、遺伝学会の会員は元よりのこととして、各種の委員会の委員として研究方面に尽力された諸君、請願委員として国会方面に活躍された諸君、學術振興会の第四特別委員会設置に尽力を願つた諸君、財団法人遺伝学研究所設立に援助を賜つた諸君、文部省を始めとして農林省、厚生省、大蔵省関係の諸君、日本学士院、日本學術會議等々数えてくればその数はおどろくべき多数に上りますし、一方静岡県庁及び当三島市の当局始め地元の後援者も決して少ない数ではありません。これ等数多い方々も本日この研究所が5周年を迎えて、研究の地固めの成つたことを知られて定めし心からの喜びを感じておられることと確く信じて居ります。我々研究所内部の者はこれ等の方々に対して中心より御礼の辞を申し上げ度いと思ひます。そして今後におきましても研究所が如何に発育成長して行くかを常に温い心を以つて見守り、更に一層の御後援を賜わらんことをお願いする次第であります。

## Ⅲ 祝 辞

### 祝 辞

文部大臣 大 達 茂 雄

本日、ここに国立遺伝学研究所創立5周年記念式が挙行されるにあたり、一言所感を述べる機会を得ましたことは、私の深くよろこびとするところであります。

国立遺伝学研究所が、昭和24年6月創立されましてから諸種のきびしい制約のもとに置かれながら、年1年と成長して、その構成も今では、形質遺伝部、細胞遺伝部、生理遺伝部および、生化学遺伝部の各部のもとに、優秀なる設備を有する各研究室を擁し、また近く応用遺伝部の増設を予定されてその研究事業も軌道に乗つてまいりましたことは、まことに御同慶に堪えないところであります。そもそも国立遺伝学研究所設立の議は、はやく昭和15年8月開催された日本遺伝学会第13回総会の議決にさかのぼるのでありますが、本研究所は実にその後、10余年にわたる同学会ならびに、日本学術振興会第4特別委員会のかたがたの絶大なる御努力の成果であります。また本研究所の今日あるは、静岡県、三島市等の終始かわらぬ御支援のたまものでありまして、本日のめでたい記念式にあたり関係各位の御努力に対して、ここにあらためて深い感謝の念をささげます。

今やわが国は、日進月歩の国際社会に立ちまじつて自立体制を強化すべき段階にあり、われわれ国民は、全力をあげて積極的、かつ建設的な活動を展開すべき時期に際しております。この時にあたり、あらゆる生物科学の基礎をなすとともに、広く人口優生、農業等の諸分野にわたつて、深い関連を有する遺伝学の研究が、国の施設と運営のもとに、着々として進行しつつあることは、まことに意を強うするに足りるところであります。

あたかも、今日ここに本研究所がその創立を記念して祝典をあげるにいたりしましたことは、よろこびに堪えないところでありまして、この機会に本研究所の創設経営に心をくだかれました所長はじめ、所員御一同その他

関係各位の日ごろの御労苦に対し、深厚の敬意を表するものであります。学術に国境なく、その進歩にはとどまるところがありません。しかも、人類社会の発展、向上が学術研究の成果に負うところの大きいことは申すまでもないところであります。私は、本日の式典を心から慶祝するとともに、所員各位が国家内外の情勢と本研究所に課せられた使命の重大性とにかんがみ、深く健康に御留意の上、さらに各部門相互の提携を緊密にし、その機能を遺憾なく發揮されんことを切望してやまない次第であります。

## 祝 辞

農林大臣 保 利 茂

本日、ここに国立遺伝学研究所創立 5 周年記念式を挙行せられるに当り、一言申述べる機会を得ましたことは、私のまことに欣快とするところであります。

顧みて当研究所が設立されましたのは、昭和24年6月であります。その誕生を見るまでには、局外者の窺い得ない幾多の困難を経なければならなかつたことと拜察されます。遺伝学と云うものは、最も基礎的な学問であります。一方地味な学問であつて、それだけ一般には関心の割合に薄い部門であり又一つには戦後の社会が混乱と不安の中に低迷していたと云う事情が設立の困難を大きくしたと思われるのであります。そうした中であつて、日本学術振興会をはじめとし、約10年に亘つて、当研究所の実現のために、御尽力下さつた方々に対しては、満腔の敬意を惜しまないものであります。

そもそも農業の生産力を増大し、食糧の供給を豊富にし、農家経済の安定を計ることは、刻下の急務であります。特に、作物、家畜等の品種を改良することは、非常に重要な問題でありまして、農林省におきましても、従来からこれに力を注ぎ、幾多の顕著な成果をあげて来たのであります。申すまでもなくこの品種改良は、遺伝学の基礎の上に立つて、その進歩に従つて、発達するものであります。殊に今後においては、作物品種に対する耐病性の賦与、わが国農家経営に適合した家畜の系統育成等の必要



が認められ、従つて、現在以上に進んだ能率的な育種法の確立が急務であると思われるのでありまして、農林省としましては、遺伝学の進歩を望むこと切なるものがあり、当研究所に対するわれわれの期待も又、甚だ大きい訳であります。

本研究所が、かくの如き遺伝学の総合的研究機関として、充分の成果を挙げるには、現在の組織、施設等には、なお十全でない点もあり、将来をまつて拡充せられる御計画であると聞きますが、かくして、当研究所が、名実共に、日本遺伝学界の中心となり、近き将来において、必ずや世界的研究所として、発展されるものと信ずるものであります。

すでにして設立後5周年を迎えましたこの研究所が、今後もひたすら発展と充実の途を進まれるよう、衷心から祈念してやみません。

一言所懐を述べて、祝辞と致します。

## 祝 辞 日本学会議会长 茅 誠 司

本日、国立遺伝学研究所の創立5周年記念日を迎えて、斯界専門家の皆様方と共に、私も心からお祝いを申し上げます。

当時、創設のことに関係いたしました一人として、5年前の今日、この研究所が孤々の声を挙げて、発足するまでの経過を顧み、誠に感慨深いものが御座います。大学の講座等では、実行できないような、遺伝学の研究を、植物学、動物学等すべての分野から、総合研究して、産業、食糧の危急を救いたい、その為に、国立の遺伝学研究所を設立して、全国到る所の研究者の研究の場としたいとの要望が、遺伝学者の与論となり、稀にみる熱心な運動が、時の政府を動かして、遂に、予算の措置がとられるに至りました。しかるに、その官制の制定せられようとした時は、占領軍の駐留下であり、その中に、三島市のような学術の中心から遠隔の地に、大学と離れて研究所を設立することは、不適當でありとする強い反対が起りました。この反対は、非常に強く、一時はこの研究所は、流産に終るかとなさへ危ぶまれたのであります。

しかるに、斯界研究者の一致団結した熱意と、折よく米国より帰任した占領軍のケリー博士の理解によつて、この困難は排除することができ、5年前の今日、ここにその産声を挙げることに成功いたしました。

爾來、小熊所長を始めとして、所員諸氏の昼夜をわかつたぬ努力は、着々として成果をあげ、又文部省当局も、その設備充実に意を重ねた結果、今日の状態に達することを得たのであります。しかしながら、日に月に、急速に進展する遺伝学の研究において、世界の水準を凌駕するためには、劃期的な設備の充実に、物理学、化学等の他の分野との協力が、絶対的に必要であることは、申すまでもありません。設立後5年の今日、所員諸氏は、自画自讃されることなく、なお努力を傾倒され、又文部当局も、これを機会に、安心されることなく、最新式設備の設置に意を用いられることを、強く要望するものであります。

来る1956年には、遺伝学に関する国際シンポジウムが開催されることになり、既に日本学術会議に国際遺伝学会議組織委員会が設けられ、逐次準備を整えておりますが、その中心は、何と申しても、当研究所に置かれているのであります。このシンポジウムが皆様方の御協力により、必ずや立派な成果をあげられるものと確く期待しております。

今や揺籃期を終え、成年期に入る第5周年記念日に当りまして、この研究所が設立当初の遺伝学者の総意に応え、又その研究成果が、産業、食糧の面に反映して、一般社会の期待に添うよう、大いに発展することを、心から希つて、私の祝辞といたします。

## 祝 辞

文部省直轄機関代表 岡 田 要

本日、国立遺伝学研究所創立5周年記念式を挙げるに当り、文部省直轄機関を代表して祝辞を述べる機会を与えられましたことは、私の光栄とするところであります。

思いますに、終戦後我国の諸制度が急激に変革せられ、あまつさえ経済の変動に伴う国家財政艱難を極めた時期に際し、この研究所の設立が計画

せられたのでありますが、よく幾多曲折と困難を克服して、昭和24年その創立を見ましたことは、これ、全くわが国遺伝学の健全な発展が然らしめたことではありますが、その間に処し、文部当局、地元関係者はもちろん、實際その設立の衝に当られた学会当事者の苦心努力の賜物でありまして、ここに深く敬意を表する次第であります。遺伝学は申すまでもなく、われわれに最も身近な研究分野を占めております。人類の遺伝に関する研究は申すまでもなく、生物の品種改良、育種栽培等における遺伝学の貢献は、やがて農畜産の進歩発展となり、人類の福祉増進に寄与した役割はまことに大なるものがあります。幸いわが国における遺伝学は世界に伍して遜色なき業績を上げ、各国注目の的となつております。

国歩多難な時にもかかわらず、本研究所の創立を見たのも、まことに偶然ではないのでありますが、さらに、近く国際遺伝学会議が、わが国で開かれるようになりましたことも、全く故なしとはしないのであります。本研究所の果さるべき使命は従来にも増して、重、かつ、大を加えられることでありましよう。私どもはここに創立5周年の盛儀に参列し、本所の過去における業績を讃え、その発展を祝福するとともに、さらに将来への輝かしい発展を祈つてやみません。ここに文部省直轄機関を代表し、一言所懐を述べて祝辞といたします。

## 祝 辞

静岡県知事 齊藤 寿夫

本日、国立遺伝学研究所創立5周年記念式が挙行されるに当り、一言御祝を申述べる機会を得ましたことは、私のよろこびに堪えないところであります。

本研究所は、我が国唯一の総合的遺伝研究機関として、人類の優良形質遺伝に関する研究は勿論、あらゆる生物資源に対する遺伝学的研究を重ねること、ここに5年、その存在の意義と重要性とは、漸く内外の認めるところであります。昨年、11月、第25回日本遺伝学会大会が、当地に於て盛大に開催せられたのも故あるところであつて、本研究所がその着実なる研

究成果と相俟つて、國際的にも次第に重要な地位を築きつつありますことは誠に御同慶にたえない次第であります。原子物理学の研究が、驚異的發展をとげつつある時、地道な遺伝学の研究が、本研究所を中心として、今後益々進展し、やがて日本民族の繁榮に寄与する様を願ひてやまないものであります。

終りに小熊所長はじめ、所員各位の創立以来の勞苦に、深甚なる敬意を表すると共に、本日の5周年記念を契機として、今後、愈々發展せられる様祈つて祝辭に代える次第であります。

## 祝 辭

静岡県議會議長 吉野倫將

本日、国立遺伝学研究所5周年記念式典が挙行せられるに当り、県議會を代表し所員はじめ関係各位に一言、御喜び申上げる機会を得ましたことは、私の深く喜びとする処であります。

当研究所は昭和24年、動植物の現わす遺伝現象の究明による人類文化の向上、發展に資する目的のもとに、わが国唯一の総合遺伝学研究所として創設されましたが、発足以来幾多の研究が続けられ既に煙草品種の改良、種鶏の育成等の研究委託も受けて、着々その成果を上げ、わが国産業の伸展に多大の貢献をいたしておりますことは周知の通りであります。更に又、当研究所の主催になる遺伝談話会、研究発表会等もたびたび開催され、わが国の文化向上の爲にも大きな役割を果しておることも見逃せないことでもあります。かような研究業績と相俟つて、斯道權威者の來訪も繁く今や漸うにして、國際的地歩を占めつつありますことは洵に慶祝に堪えないところであります。何事であれ、研究と云ふことは並大抵のことではなく、とりわけ遺伝学のように、その結果を見出すに長時日の実験と、研究を繰返さなければならぬ仕事に従事されておる所員の皆さんの忍耐と、御苦心には、唯々敬服するばかりであります。県議會といたしましても、本日の創立5周年を機会に遺伝学に対する認識を新たに、今後、出来る限りの御援助をいたす考えであります。所員の皆さんに於かれましても

当研究所の使命の重大性に想いをいたされ、益々、研究に御精進あらんことを切望する次第であります。終りに臨み、当研究所のいよいよの御隆昌を祈念し、以つて祝辞といたします。

## 祝 辞

三島市長 松 田 吉 治

本日、茲に意義深い当研究所開所5周年記念式典が催されますことを心からお慶び申し上げます。

今から5年前箱根街道の松並木の間から見える錦田の高台に遺伝学研究所というものが出来ると聞いた時、申し訳ないことながら、市民の殆んどが何の関心も示しませんでした。そして、所内の畑に色々の植物が成長をはじめても益々解らない表情をしておりました。しかし、お気軽な先生がたは所長さんをはじめ皆さんで、見学の学生や団体に対しても、御繁忙な研究の中をおさき下さつて、懇切な解説をして下さり、又時には街で催す講演会等にも何時でも心よくお出かけをいただくなど、実に御迷惑をおかけして参りました。しかし、市民は只今ではすっかり私達の街の遺伝学という気持ちになり、解らないながらも世界人類の幸福のための大研究が行われていることに思をいたす様になりました。そして、近頃では街ゆく旅人が富士の眺を賞で水の美しさをたたえたりいたしますと、三島にはもう一つ国立遺伝学研究所があり、そして世界に有名な先生がたが研究していらしやいますと自慢もしたり街の名誉とも感じている次第であります。

又昨年はこの地に日本遺伝学会大会が開かれ数百人のその道の先生がたがお集りになり、それぞれの研究発表をいたされたのでありますが、私どもにはその片鱗さえも理解に困難なことながら、自然科学の領域の如何に深遠であるかということに今更に驚きを味つた次第であります。しかし、僅かな科学知識しか持たない私共にも、この人類文化への一つの不安としては、科学の進歩が必ずしも常に人類に有利のことのみではないような気がいたすのであります。目下、日本中の不安とされる放射能問題にしても、これが次の時代の吾々の子孫にどういう形で生かされるかということ一つ

にしても誠に感慨なきを得ないのでありまして、今こそ人類は百年の計の爲に眞の優生を考える時であると思う次第であります。此の時に当り、幾多の秘められた自然の原則又そこから生れる人類への影響、これ等の総べてをあげて諸先生方の御研究に大きな期待が寄せられているのでありまして国民全体が否、人類全体が一筋にその光をこの箱根路の高原に求めているのであります。私ども市民は先生がたの御研究に出来得る限り物心両面の御協力を申し上げ、先生がたが好条件のもとで御勉強願えますように最善の努力をいたしますことが市民の義務であり、又文化を理解する態度だと深く感ずる次第であります。

記念式典にあたり、日頃の先生がたの御厚意に感謝をいたしますと共に諸先生の御健祥と吾が遺伝学研究所の益々御発展をお祈りして祝辞といたします。

## 祝 辞

日本遺伝学会会長 篠 遠 喜 人

本日、国立遺伝学研究所の5周年記念式典がおこなわれますにあたり、日本遺伝学会はつつしんでお祝いを申し上げます。

国立遺伝学研究所と日本遺伝学会とはふかい因縁をもつております。このことは国立遺伝学研究所の要覧第1頁にも明らかでありますし、ただ今の小熊所長の式辞からもうかがえます。昭和15年8月京城で開かれました大会で、日本遺伝学会は満場一致して国立遺伝学研究所設立の決議案を可決しました。日本遺伝学会は、それからは国立遺伝学研究所設立委員会を中心として、その委員長は今の国立遺伝学研究所の所長の小熊先生でありましたが、10年の久しい間その実現につとめ、この大戦のちは、さらに熱心に片山内閣と吉田内閣とにはたらきかけたのであります。そしてついに昭和24年6月1日にその誕生を見ました。

このときから日本遺伝学会の手からははなれましたが、その生長をじつと見守り、その発展をもつともつよく願つたものは、日本遺伝学会であつたといつてもよろしいかと思ひます。はたして私どもの期待しましたよう

に、この5年の間の進歩のあとにはいちじるしいものがあります。そのすぐれた研究者と多くの業績、その近代的な設備、経験のふかい事務職員、さらにそこに見ることのできる将来への発展の約束など、すべてはその証拠であります。

およそその国の文化の水準の高さは、その国の科学文化のそれが有力な尺度であるといわれます。わが国の遺伝学は幸にもその一つであるともいえましょう。このことは、さきほど茅会長のお祝辞の中にもありましたように、昭和31年、1956年に日本に国際遺伝学会議を開くことが、昨年の夏フランスのニースで開かれました国際生物科学連合やイタリーのベラジオにありました第9回国際遺伝学会議で、満場一致で認められたことによつてもわかります。

この会議のときは、世界各地よりすぐれた遺伝学者が日本に集るでありましょうが、そのときにあたり、このようなりつばな国立遺伝学研究所がありますことは、まことに幸であり、心強いことであるといわなければなりません。これがあることの意義は重大でありましょう。

このように、国内的にも国際的にも大きな役割をもつこの研究所が、ここにその第一期の仕事を終つて、そのちへの発展の基礎をそなえ、その使命をはたすのに明るい見とおしをもつようになられましたことは、まことにおめでたいことと、ここに心からお祝いを申しあげ、これからのすこやかな御発展を祈るしだいであります。

これをもつてお祝いのことばといたします。

(当日口述したものより要旨を後記)。

## IV 祝 電

参議院議長 河 井 弥 八

貴研究所の創立5周年を祝し、多年の御功績を謝し、益々御研鑽を祈ります。

参議院議員 野 田 卯 一

創立5周年の御盛典を祝し、今後の成果を期待します。

参議院議員 一 松 定 吉

御盛典を御祝申し上げます。

衆議院議員 遠 藤 三 郎

創立5周年記念の御盛典を祝し、今後の発展を祈る。

広島大学長 森 戸 辰 男

創立5周年記念を祝し、今後益々學術発展のため貢献されんことを祈ります。

北海道大学長 島 善 鄰

本日の御盛典を祝し、今後の一層の御発展を祈る。

島根農科大学長 竹 崎 嘉 徳

御盛典を祝し、今後の御発展を祈る。

京都大学名誉教授 桑 田 義 備

5周年記念日に際し、謹しみて貴所の大きな御発展を祝す。

北海道大学理学部長 杉 野 目 晴 貞

創立5周年を祝し、貴所の御発展を祈る。



名古屋大学教授 増 井 清

御盛典を祝す。

国際基督教大学教授 篠 遠 喜 人

5周年の祝典をおよろこび申し上げます。

東北大学教授 小 野 知 夫

御盛會を祝し、今後の御発展を祈る。

京都工芸繊維大学

御盛典を祝し、今後の御発展を祈る。

金沢大学結核研究所

御盛典を祝し、今後の御発展を祈る。

熊 本 大 学

国立遺伝学研究所5周年創立記念式の御盛典を祝し、今後の御発展を祈る。

大分県温泉熱利用農業研究所長 宮 沢 文 吾

創立5周年を祝す。

永井威三郎

御盛典を祝す。

染色体学会

貴所の5周年式典を祝す。

仙台談話会

御盛會を祝し、今後の御発展を祈る。

# V 創立5周年記念式概要

日 時 昭和29年6月1日11時30分

場 所 国立遺伝学研究所講堂

## 記念式次第

1. 開式の辞
2. 所長式辞
3. 来賓祝辞
4. 祝電披露
5. 閉式の辞

式終了後祝宴、所内見学、

## ◎ 招待状発送者及出席者

(註 ○印は出席者を示す)

国立遺伝学研究所設立請願人関係		職 名	氏 名
職 名	氏 名	北海道大学教授	松 浦 一
(昭和22年現在)	会 田 竜 雄	前 静 岡 市 長	宮 崎 通 之 助
元農林省農事試験場長	安 藤 広 太 郎	農 事 試 験 場 長	盛 永 俊 太 郎
京都大学助教授	千 野 光 茂	東 京 農 林 專 門 学 校 長	永 井 威 三 郎
東 京 大 学 教 授	千 福 田 邦 三	北 海 道 大 学 教 授	長 尾 正 人
九 州 大 学 助 教 授	福 島 榮 三 二	郡 是 蚕 研 所 長	中 田 太 郎
東 京 大 学 教 授	古 畑 種 二	京 都 大 学 教 授	西 山 市 三
九 州 大 学 教 授	林 禎 二	東 京 大 学 教 授	野 口 弥 吉
民 族 科 学 研 究 所 長	池 見 猛	お 茶 の 水 女 子 大 学 教 授	岡 徹
岡 山 大 学 教 授	猪 野 俊 平	東 北 大 学 教 授	大 里 俊 吾
東 北 大 学 教 授	伊 藤 実 夫	東 京 大 学 教 授	坂 口 康 藏
京 都 大 学 教 授	香 川 冬 夫	東 京 大 学 教 授	佐 々 木 清 綱
衆 議 院 議 員	角 田 幸 吉	広 島 文 理 大 学 教 授	下 斗 米 直 昌
国 際 印 刷 社 長	笠 井 重 治	東 京 大 学 教 授	篠 遠 喜 人
厚 生 省 公 衆 衛 生 院 技 官	川 上 理 一	前 農 林 省 農 事 試 験 場 長	寺 尾 新 吉
熊 本 大 学 教 授	木 田 文 夫	前 京 城 大 学 医 学 部 長	上 田 常 吉
静 岡 県 知 事	小 林 武 治	農 林 省 蚕 糸 試 験 場 嘱 託	梅 谷 与 七 郎
片 倉 蚕 糸 研 究 所 長	小 針 喜 三 郎	東 京 大 学 教 授	和 田 文 吾
東 京 蚕 糸 大 学 教 授	木 暮 楓 太 事	前 台 北 大 学 教 授	山 根 甚 信
千 葉 医 大 学 教 授	小 池 敬 一	山 階 鳥 類 研 究 所 長	山 階 芳 鷹
九 大 名 譽 教 授	額 綱 理 一		
厚 生 省 公 衆 衛 生 院 技 官	古 屋 芳 雄	国立遺伝学研究所設立関係	
静 岡 市 長	増 田 茂	職 名	氏 名
参 議 院 議 員	松 村 真 一	日 本 学 士 院 長	山 田 三 良

衆議院議員 竹田儀一  
 参議院議員 船田亨二  
 元三島市助役 西山富佐太  
 大日本ビール研究所長 田辺寿之助  
 参議院議員 松山茂助  
 元内閣総理大臣 桜内辰郎  
 元文部大臣 片山哲男  
 衆議院議員 森戸辰太郎  
 元文部省専門科学局長 北村徳太郎  
 大阪学芸大学講師 近藤鶴代  
 元商工省技官 清水勤二  
 衆議院議員 下島儀三  
 参議院議員 苦米地義三  
 衆議院議員 河崎ナツ雄  
 元東大農学部部長 野溝勝  
 元東大医学部長 田中丑雄  
 北隆館社長 田宮猛太郎  
 元三島町長 福田良太郎  
 東北大学教授 花島周一(夫人)  
 田中鉱業株式会社社長 小野知夫  
 前京城大学教授 田中次郎  
 元毎日新聞記者 鈴木清一郎  
 元文部次官 石川欣次郎  
 前日本専売社副總裁 有光次郎  
 参議院議員 野田卯一  
 衆議院議員 一松定吉  
 日本動物学会々々頭 芦田得輔  
 日本植物学会々々長 小倉謙  
 日本生理学会長 戸塚武彦  
 日本林学会長 吉田正男  
 日本人類学会長 長谷部言人  
 前学習院教授 服部広太郎  
 日本学術振興会 新谷武衛

日本遺伝学会名譽會員

職名	氏名
日本遺伝学会名譽會員	増井清
〃	寺尾博
〃	山口弥輔
〃	保井コノ

〃 星野勇三  
 〃 桑田義備  
 〃 三宅騷一  
 〃 宮沢文吾  
 〃 野原茂六  
 〃 竹崎嘉徳

日本遺伝学会各地談話会代表者

職名	氏名
札幌 幌台談話会	牧野佐二郎
仙台 東京談話会	岡部作一郎
東京 新松本談話会	森脇大五郎
名古屋 古屋談話会	江村重雄
富山 富山談話会	福田宗一
京都 大坂談話会	福島村環
大阪 福岡談話会	小林貞作
福岡 熊本談話会	木原均
熊本 宮崎談話会	吉川秀男
〃	大倉永治
〃	永松土己郎
〃	鈴木簡一
〃	片山義勇

財団法人遺伝学普及会関係

職名	氏名
東京都立竹早高校長	中路正義
東京教育大学教授	平塚直秀
東京大学教授	湯浅明
京都大学教授	山下孝介
大阪大学教授	安澄権八郎
農業技術研究所	山崎義人
東京女子大学教授	多羅尾四郎
名古屋大学助教授	近藤恭司
東京女子医大教授	久保田くら
東京農業大学教授	近藤典生
遺伝普及会事業部委員	佐藤辰水
〃	山田映次
〃	佐久間信徳
東京大学助教授	田中信英
東京大学教授	井上篤
東京都立北園高校教官	山浦尚平
群馬大学教授	井宮
宇都宮大学助教授	宮本



東京外語大学庶務課長	兵藤 勇 一	防災研究所長	速水 頌 一 郎
文部通信社社長	山口 競 吉	基礎物理学研究所長	湯川 秀 樹
教育情報社社長	西崎 博 吉	微生物病研究所長	谷口 腴 二 郎
低温科学研究所長	吉田 順 五	産業科学研究所長	岡部 金 次 郎
応用電氣研究所長	浅見 義 弘	農業生物研究所長	西門 義 一 栄
触媒研究所長	堀内 寿 郎	温泉研究所長	清水 多 秋
結核研究所長	高橋 義 夫	温泉治療学研究所長	八田 恵 弘
金属材料研究所長	増本 正 幸	応用力学研究所長	渡辺 耕 二 郎
農学研究所長	坂本 健 二	産業労働研究所長	森 倉 登 綱
選鉱製錬研究所長	小野 名 敏 俊	風土病研究所長	登 倉 登 綱
抗酸菌病研究所長	海老 比 忠 三 郎	体質医学研究所長	竹屋 上 俊 亮
科学計測研究所長	日比 福 三 郎	国立教育研究所長	西 尾 実 要
高速力学研究所長	沼地 福 三 郎	国立国語研究所長	岡 田 景 景
電氣通信研究所長	渡 辺 達 郎	国立科学博物館長	岡 部 長 景
非水溶液化学研究所長	鳥 池 敬 事	国立近代美術館長	佐々木 達 治 郎
腐敗研究所長	小 池 敬 事	国立統計数理研究所長	柴田 銀 次 郎
伝染病研究所長	長谷川 秀 治 郎	生産科学研究所長	坂 井 剛 昂
理工学研究所長	永井 雄 三 郎	理論物理学研究所長	三 村 剛 仙 治 郎
東京天文台長	萩原 雄 信 治 郎	化学研究所長	内 野 仙 治 郎
地震研究所長	那 須 信 治 郎	緯度観測所長	池 田 泰 彦
東洋文化研究所長	辻 直 一 郎	資源科学研究所長	朝 比 奈 荒 雄
社会科学研究所長	山之内 次 郎	大 阪 大 学 長	今 村 原 忠 雄
新聞研究所長	千葉 雄 九 郎	東 京 大 学 長	矢 内 善 鄰
生産技術研究所長	兼重 寛 太 郎	北 海 道 大 学 長	島 川 幸 辰
史料編纂所長	坂本 謹 一 郎	京 都 大 学 長	滝 高 橋 里 美
応用微生物研究所長	坂口 謹 一 郎	東 北 大 学 長	山 田 精 蔵
宇宙線観測所長	平 田 森 三 一 郎	九 州 大 学 長	勝 沼 精 蔵
建築材料研究所長	狩 野 春 一 郎	名 古 屋 大 学 長	杉 野 目 晴 貞
資源化学研究所長	舟木 好 右 衛 門	北 海 道 大 学 理 学 部 長	大 杉 三 九 郎
精密機械研究所長	佐々木 重 雄 吉	靜 岡 大 学 長	小 笠 原 三 九 郎
窯業研究所長	山 本 勇 三 夫 人	大 蔵 大 蔵 政 務 次 官	植 木 野 一 光 郎
電氣科学研究所長	西 川 栄 由 重 人	大 蔵 大 蔵 政 務 次 官	河 窪 谷 永 貞 一 郎
燃料科学研究所長	藤 都 留 坂 伸 吉	大 蔵 大 蔵 省 管 財 局 長	森 永 貞 一 郎
光學研究所長	石 川 巖 淳 樹 平 助 勇 助	大 蔵 大 蔵 省 主 計 局 長	江 口 事 務 官
経済研究所長	小 金 原 茂 俊 武 助	大 蔵 大 蔵 省 主 計 局 農 林 係	高 木 主 計 官
結核研究所長	貝 塚 本 武 助	大 蔵 大 蔵 省 主 計 局 総 務 課	鈴 木 主 計 官
環境医学研究所長	山 藤 本 武 助	大 蔵 大 蔵 省 主 計 局 文 部 係	大 村 事 務 官
空電研究所長	藤 館 近 藤 金 助		相 沢 事 務 官
人文科学研究所長			村 上 事 務 官
結核研究所長			長 谷 川 事 務 官
工学研究所長			
木材研究所長			
食料科学研究所長			



県 会 議 員	山 口 盛 枝
〃	野 田 八 大 夫
〃	佐 田 友 三 郎
〃	山 口 正 三 九 郎
〃	矢 野 久 太 郎
〃	鈴 木 政 之 助
〃	鈴 木 次 郎
〃	岩 崎 龜 作
県 議 会 事 務 局 長	絹 村 庄 作

市 会 議 員	高 田 龜 三 郎
〃	〃 榑 関 太 郎
〃	〃 藤 沼 信 雄
〃	〃 加 藤 伊 太 郎
〃	〃 野 村 幸 藏
〃	〃 鈴 木 作 三 吉
〃	〃 鈴 木 要 忠 男
〃	〃 高 藤 五 郎
〃	〃 伊 東 清 太 郎
〃	〃 渡 辺 太 平
〃	〃 山 本 大 角
〃	〃 上 杉 延 雄
〃	〃 増 田 男

三島市役所関係

職 名	氏 名
市 長	松 田 吉 治
市 助	石 垣 彦 太 郎
入 役	鈴 木 文 雄
総 務 課 長	植 松 利 作
土 木 水 道 課 長	佐 藤 清 治
土 木 水 道 課 長	西 島 貞 一
社 会 福 祉 事 務 所 長	山 田 出 正 三
市 教 育 委 員 会 委 員 長	小 藤 井 和 三
市 教 育 委 員 会 委 員 長	藤 石 井 賢 作
消 防 署 長	風 間 正 光
函 書 参 事 長	松 渡 辺 計
市 教 育 委 員 長	渡 野 弥 一
市 議 員	〃 佐 田 清 次 郎
〃	〃 多 田 村 茂 明
〃	〃 高 木 多 喜 造
〃	〃 酒 井 郁 二 作
〃	〃 石 渡 山 善 夫
〃	〃 北 渡 辺 政 夫
〃	〃 室 伏 藤 平
〃	〃 水 口 三 平
〃	〃 野 村 岩 次 郎
〃	〃 木 村 林 太 郎
〃	〃 市 川 喜 治 作
〃	〃 杉 本 治 作
〃	〃 山 田 甚 一
〃	〃 奈 良 橋 倉 吉

三島市内官公署関係

職 名	氏 名
北 田 方 地 区 署 長	山 下 利 彦
静 岡 社 会 事 務 所 長	溝 添 準 一
静 岡 税 務 事 務 所 長	青 島 吉 次 郎
静 岡 税 務 事 務 所 長	栗 田 憲 二
静 岡 税 務 事 務 所 長	東 山 実 正
静 岡 税 務 事 務 所 長	鈴 木 本 正
静 岡 地 方 法 務 局 長	松 下 忠 夫
静 岡 立 出 張 病 院 長	内 野 幸 三
三 島 公 共 職 業 安 定 所 長	佐 藤 秀 守
三 島 郵 便 局 長	小 沢 金 太 郎
社 会 保 險 三 島 病 院 長	河 合 五 郎
静 岡 政 務 事 務 所 長	中 島 洗 勇
静 岡 三 島 保 健 所 長	神 村 手 正
三 島 商 工 会 議 所 會 頭	住 本 昇 三 郎
三 島 簡 易 裁 判 所 長	水 口 豊 一
三 島 区 検 察 庁 副 検 事 長	渡 中 誠 一
静 岡 統 計 調 査 事 務 所 長	越 山 貴 男
三 島 電 報 電 話 局 長	越 藤 波 清 太 郎
三 島 市 警 察 署 長	藤 原 清 太 郎
三 島 食 糧 支 所 長	池 谷 芳 夫

日本大学三島教養部長 〇秋葉安太郎  
 三島北高等学校校長 〇鈴木一義  
 三島南高等学校校長 〇小林寛

三島新聞社 〇杉沢長十郎  
 産業タイムズ社 〇和田庄五郎

その他

職名	氏名
三島女子高等学校校長	〇勝間田俊一郎
韭山高等学校校長	〇岡谷潔
田方農業高等学校校長	〇戸塚静
伊豆逋信病院長	〇山岡克己
三島大社宮司	〇矢田部盛枝
元三島市長	〇朝日原作
元富士産業株式会社社長	〇小口彦七
東洋醸造株式会社社長	〇白井俊二
元富士産業関係者	〇滝野高志
	〇吉田審
静岡果成臨時所教員	〇岡野徳右衛門
沼津市長	〇高木恵太郎
沼津市議会議長	〇清水清二
広島A.B.C.Cモーション所長	〇飯塚直彦
沼津市立病院院長	〇飯塚直彦
東大伝染病研究所	〇安東洪次郎
前静岡県副知事	〇高見三郎
	〇芦川銀次郎
	〇青野政夫
	〇川野義男
東洋醸造株式会社社長	〇リリエン・フェルト
東研外国山研究員	〇半田順俊
和歌山果立職	〇長泉寺住
医科大學助教授	〇天野義春
谷田駐在署	〇田畑宗夫
三島東中学校校長	〇江藤秀雄
東京大学助教授	

旧職員

職名	氏名
静岡大学事務局長	〇塚本盛平
浪速大学助教授	〇大垣昌弘
南山大学講師	〇加地早苗
帯広畜産大学講師	〇伊藤太郎
東京都立大学理学部	〇薄秀男
信州大学繊維学部	〇林善三
	〇秋山芳雄

全国種鶏遺伝研究会関係

職名	氏名
顧問	〇小杉方也
	〇米野与七郎
	〇工藤勘八郎
前常務理事	〇中村竹忠
	〇河原孝嘉
	〇大窪幸亘
	〇小林亘忠
	〇赤津

専売公社三島分室関係

職名	氏名
	〇田中正雄
	〇今井晟二
	〇川口富次
	〇綾部富雄
	〇長島義和
	〇木下吉

新聞社関係

職名	氏名
毎日新聞三島通信部	〇柴田喜久雄
朝日新聞	〇野口寅男
中部日本新聞	〇内田完
静岡新聞	〇牧野辰雄
静岡民報	〇小川昌翁
三島ニユース	〇堀内皇富士
三島民報社	〇小西政三
東静岡毎日新聞社	〇渡辺武彦

客員及特別研究生関係

職名	氏名
客員	〇尾崎安之助
	〇田中克己
特別研究生	〇松井千秋
	〇渡辺強三
	〇吉田瑞男
	〇吉沢攻
内地研究員	〇山田行雄



◎ 祝辞を受けたもの

文部大臣、農林大臣、日本学術会議会長、文部省直轄機関代表、静岡県知事、静岡県議会議長、三島市長、日本遺伝学会会長、

◎ 祝電を受けたもの

参議院議長河井弥八、広島大学長森戸辰男、参議院議員野田卯一、参議院議員一松定吉、増井清、桑田義備、宮沢文吾、永井威三郎、北海道大学長島善鄰、北海道大学理学部長、島根農科大学長竹崎嘉徳、熊本大学、金沢大学結核研究所、京都工芸繊維大学、染色体学会、遠藤三郎、篠遠喜人、小野知夫、仙台談話会、

◎ 公開講演会

創立5周年を記念し下記のとおり公開講演会を行う。

沼津市 産業会館 6月中に行う。

東京都 読売講堂 9月中旬に行う。

◎ 陳列室

遺伝に関する研究資料を陳列する。

◎ 創立5周年記念式役員

委員長	小 熊 捍	接待	駒 井 卓
総務	竹 中 要	見学	田 中 義 麿
会計	宮 沢 正 夫	写 真	吉 田 俊 秀
受付	杉 生 純 義	陳 列	辻 田 光 雄
設備	乙 藤 寛 一	警 備	酒 井 寛 一
連絡	林 孝 三		

◎ 記念祝賀懇親会

記念式行事が終つて、16時から、国立遺伝学研究所創設と発展とのために尽力された方々に対し、いささか感謝の意を表するため、かつまた今後研究所の発展についての御高話を拜聴するため、財団法人遺伝学普及会の援助によつて懇親談話会をもうけた。記念式に臨席賜わる通知のあつた方々の内、下記の方々を招待した。会場は収容人員の都合で四カ所に分けた。懇親談話会では非常に愉快的、そして有意義な一時を過ごすことができた。

国立遺伝学研究所 5 周年記念懇親会招待者名簿 (50音順)

(○印は出席者を示す)

	A 南山荘	B 竹直	C と き わ	D 竹葉
1	郎龜郎雄二澄要治一司藏治吾二郎雄郎助郎平博競子治治枝見吉勇治弥雄男治捍躬	巖郎助入夫男均也綱幸郎登郎治夫徳二人基郎清夫一鷹ノ男雄郎男二鷹卓一三	昌衛猛平二郎雄徹夫治ら生信人貞郎徳三吉忠秀一三郎郎郎郎人次篤明要雄秀夫	郎雄二作作郎彦繁郎二造郎郎雄作三郎治郎造男一竹孝夫助郎夫素晴男平枝郎一平勇子一郎吉藏夫雄吉一夫義
2	徹 太角 駿 重清	治之 英正義 方清正 一三 信寿正祥言種太 武鷹芳正忠七正晟義 寛孝	直武 俊英七秀 知永ノ典間喜儀四 信市弥一直宗賢 二八太五八 義映 光俊和	太貞藤喜利賢蕃太静 三清弥都太五文治作 三 次喜 忠新 太之次 房福正延三藤盛太甚代 光太 三倉幸政信要寛正純
3	田崎彦 田崎 垣杉井野田井間 沼林出水木松 口辺木 尾口 原西川 谷島野塚井 田田達中口 熊原	川金清 尾野原杉々木 禮倉威 須村泉山 谷畑田 柄宅階井田山 野中井中井井	米武 俊英七秀 野上谷藤 野倉保藤久遠島羅 中山口山塚田本 野山永脇澄 崎田 浦浅 中 田田里	一口渡川松間山村浦松友 藤野井 間木木木木 田木藤藤 村島 八政岩 房福正延三藤盛太甚代 光太 三倉幸政信要寛正純
4	池岩石上白岡岡笠勝茅勝小清鈴立田田高塚寺出藤中長花平福松山大田坂 小松	小岡大岡神川木小佐坂坂登永那那中西長古福増真三山保吉横米田今 田駒酒林	斗谷見 野上谷藤 野倉保藤久遠島羅 中山口山塚田本 野山永脇澄 崎田 浦浅 中 田田里	野口渡川松間山村浦松友 藤野井 間木木木木 田木藤藤 村島 八政岩 房福正延三藤盛太甚代 光太 三倉幸政信要寛正純
5			下新池猪井梅江岡小大久近佐篠下多田西野島平福松牧宮盛森安山山山湯竹辻吉古	天井石市植風北木北小佐佐佐酒輛新鈴杉鈴住関多高伊中西野鈴野細真松増水室山矢山山吉渡那高奈野渡藤鈴乙宮杉
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				
26				
27				
28				
29				
30				
31				
32				
33				
34				
35				
36				
37				
38				
39				
40				
41				
42				
43				
44				
45				
46				
47				
48				
49				
50				
51				
52				

## Ⅶ 研究のあゆみ

昭和24年6月当研究所が廃止してから、恵まれない研究施設と経費ととくみながら、たゆまざる研究員の努力は、短かい期間に多くの研究成果が論文として発表されている。いまここに当所文献集に番号を附し登録されているものをあげ5年のあゆみを記録した。

この中には目下印刷中のものも含まれている。なおこの外に文献集に登録されないで印刷に附したのものもある。

### CONTRIBUTION FROM THE NATIONAL INSTITUTE OF GENETICS, JAPAN

- No. 1. Taku KOMAI, CHINO, M. and HOSINO, Y.; Contributions to the evolutionary genetics of the Lady-Beetle, *Harmonia*, I. Geographical and temporal variations in the relative frequency of the elytral pattern types and in the frequency of elytral ridge. *Genetics*, 35: 589-601, (1950).
- No. 2. Taku KOMAI; Semiallelic Genes. *American Naturalist*, 84: 381-392, (1950).
- No. 3. 駒井 卓. 半対立遺伝子. 「遺伝の総合研究」Ⅲ: 111-116, (1952).
- No. 4. Taku KOMAI; Notes on lingual gymnastics Frequency of tongue rollers and pedigrees of tied tongues in Japan. *Jour. Hered.*, 42: 293-297, (1951).
- No. 5. 竹中 要. 三倍体の不稔性 「遺伝の総合研究」Ⅰ: 139-142, (1950).
- No. 6. Sanae KAJI and Mamoru ICHIKAWA; Function of the Corpus allatum in silkworm (*Bombyx mori*) *Ann. Zool.*, 24 (1), (1950).
- No. 7. 木村 資生. 自殖による純系育成の過程と染色体部分の組換に就て. 「遺伝学雑誌」Vol. 26. No. 1-2: 53-62, (1951).
- No. 8. 木村 資生. 集団中に於ける染色体部分の組換に就て
- No. 9. Taku KOMAI; Photograph of a man with a tail. *Jour. Heredity*, 41 (9): 247-248, (1950).
- No. 10. Taku KOMAI; On the origin of the tortoiseshell male cat-a correction. *Proc. Jap. Acad.*, 28: 150-155, (1952).
- No. 11. Taku KOMAI and Yasushi HOSHINO; Contributions to the evolutionary genetics of the lady-beetle *Harmonia*. II. Microgeographic variations. *Genetics*, 36: 382-390, (1950).
- No. 12. Yô TAKENAKA; Note on cytological observations in *Colchicum*, with reference to Autotoxicosis and sterility. *Cytologia*, 16 (1):

- 95-99, (1950).
- No. 13. 田中 義麿. 蚕の星紋の遺伝学的研究. 「遺伝の総合研究」Ⅱ: 225-234, (1951).
- No. 14. 加地早苗, 大垣昌弘. ショウジョウバエにおける Nitrogen mustard による Phenocopy の誘発について. 「動物学雑誌」60: 7, (1951).
- No. 15. 田中 義麿. 柞蚕の越年と環境特に日長効果. I. 「日本蚕糸学雑誌」Vol. 19. No. 4: 358-371, (1950). 同Ⅱ同 Vol. 19. No. 5: 429-446, (1950). 同Ⅲ Vol. 19. No. 6: 580-590, (1950). 同Ⅳ同 Vol. 20. No. 1: 1-9, (1951). 同Ⅴ同 Vol. 20. No. 2: 132-138, (1951).
- No. 16. 田中 義麿. 柞蚕の品種育成. 「日本蚕糸学雑誌」Vol. 20. No. 3: 1-11, (1951).
- No. 17. 辻田 光雄. 家蚕に於ける遺伝子と形質とを結ぶ働き手に関する研究. 「遺伝の総合研究」Ⅱ: 185-195, (1951).
- No. 18. Flora A. LILJENFELD; Genome-analysis in *Triticum* and *Aegilops*. X. *Cytologia*, 16(2): 101-123, (1951).
- No. 19. 小 熊 捍. ムカシトンボの染色体. 「遺伝の総合研究」Ⅱ: 23-26, (1951).
- No. 20. 大垣昌弘, 八木寿郎. 生物変異の光力学的誘発. I. 表現型模写. 「動物学雑誌」62: 427-443, (1953).
- No. 21. 竹 中 要. クワンザウ属の核型と不稔性. 「遺伝の総合研究」Ⅲ: 71-90, (1952).
- No. 22. Taku KOMAI and Shigeo EMURA; Genetic studies of the polymorphic land-snail, *Bradybaena similaris*. *Genetics*, (印刷中)
- No. 23. 駒井 卓. オナジマイマイの地理的変異. 「貝類学雑誌」16: 87-103, (1951).
- No. 24. 酒井寛一. 植物育種における個体選択と選抜の効率に関する研究. 「育種学雑誌」Vol. 1. No. 1: 1-9, (1951).
- No. 25. Seiji MATSUMURA; Radiation genetics in wheat I. Chromosome aberration in einkorn wheat induced by irradiation. *Cytologia*, 16(3): 201-211, (1951).
- No. 26. 辻田光雄. 家蚕バイラスの細胞学的研究. 「学術月報」Vol. 4. No. 2. 39-50, (1951).
- No. 27. Seiji MATSUMURA; Chromosome analysis of the Dinkel genome in the offspring of a pentaploid wheat hybrid. I. *Cytologia*, 16(4): 265-287, (1951).
- No. 28. 酒井寛一. ラムシユ育種における集団選抜と集団の取扱いの問題. 「農業及園芸」27: 5-8, (1952).
- No. 29. Seiji MATSUMURA; Chromosome analysis of the Dinkel genome in the offspring of a pentaploid wheat hybrid II. Which of the three vulgare genomes of the B-spetloid is incomplete?. *Cytologia*, 16(4): 307-314, (1952).
- No. 30. 松村清二. コムギ五倍雑種の研究. 「遺伝学雑誌」26: 211-218, (1951).
- No. 31. Taku KOMAI; Incidence of the genes for coat colors in Japanese

- cats. *Annotationes Zoologicae Japonenses* 25(1-2) : 209-211, (1952).
- No. 32. Taku KOMAI; Three Japanese Pedigrees of Typical Brachydactyly. *Journal of Heredity*, 44(2) : 79-85, (1953).
- No. 33. Yoshimaro TANAKA; Genetics of silkworms. *Advances in Genetics*, 5 : 217-239, (1953).
- No. 34. Seiji MATSUMURA; Chromosome analysis of the Dinkel genome in the offspring of a pentaploid wheat hybrid III. 29-chromosome D-haplo-somic and their relations to nullisomics. *Cytologia*, 17 (1) : 35-49, (1952).
- No. 35. Taku KOMAI and Albert Shigeru AÉ; Genetic studies on the pierid butterfly *Colias hyale poliographus*. *Genetics*, 38(1) : 65-72, (1953).
- No. 36. 吉田俊秀. コルヒチン及びマスタードの吉田肉腫の細胞分裂に及ぼす影響. 「遺伝の総合研究」Ⅲ : 199-204, (1952).
- No. 37. 吉田俊秀. 吉田肉腫異種移植の細胞学的研究. 「遺伝の総合研究」Ⅲ : 185-198, (1952).
- No. 38. Motoo KIMURA; The recombination of chromosome segments through continued self-fertilization. *Cytologia*, 18 (2) : 93-104, (1953).
- No. 39. Seiji MATSUMURA; Chromosome analysis of the Dinkel genome in offsprings of a pentaploid hybrid IV. Gene-analysis. *Seiken Zihō*, No. 6, 36-45, (1953).
- No. 40. Kan-Ichi SAKAI; Studies on competition in plants. I. Analysis of the competition variance in mixed plant populations. *Jap. Jour. Bot.*, 14(1) : 161-168, (1953).
- No. 41. 川口榮作, 吉田俊秀. ヒマヤン雑種の細胞学的研究. 「染色体」17-19 : 674-676, (1953).
- No. 42. 藤井太朗. コムギ雑種の子孫における異形態の双芽の1例. 「遺伝学雑誌」28 : 105-109, (1953).
- No. 43. Seiji MATSUMURA and Akira MOCHIZUKI; Improvement of sugar beet by means of induced triploidy. *Japanese Journal of Genetics*, 28 : 47-56, (1953).
- No. 44. Kanji GOTOH; Genetic studies on eggplant (*Solanum melongena* L) I. Regression analysis of quantitative gene action. *Genetica*, 26 : 445-452, (1953).
- No. 45. Kanji GOTOH; Genetic studies on eggplant (*Solanum melongena* L) II. The heritability of some quantitative characters and estimation of minimum number of genes. *Genetica*, 27 : 453-467, (1953).
- No. 46. Taku KOMAI, Yasunosuke OZAKI and Wataru INOKUMA; A Japanese kindred of hyperphalangism of thumbs and duplication of thumbs and big-toes. *Folia Hereditaria et Pathologica*, 2 : Fasc 4, 307-312,

Pl.1 (1953).

- No. 47. 竹中 要. タバコ属植物の細胞遺伝学的研究 III. 「遺伝学雑誌」28 : 155-162, (1953).
- No. 48. 同 IV. 「染色体」17-19 : 706-713, (1953).
- No. 49. 同 V. 「植物学雑誌」66 : 269-276, (1953).
- No. 50. 松村清二, 望月明. 甜菜三倍体の育成とその特性, 松村編著「甜菜の三倍体による育種」第2章 1-13, (1953).
- No. 51. 松村清二. 三倍性甜菜の研究結果概要, 同上 第8章 111-129, (1953).
- No. 52. Tōru ENDO; Biochemical and genetical investigations of flower colors in *Viola tricolor* L. I. Jap. Jour. Bot. 14 : 187-193, (1954).
- No. 53. 松村清二, 藤井太郎. 一粒小麦における超短波照射実験. 「遺伝学雑誌」29 : 13-17, (1954).
- No. 54. 吉田俊秀. エールリッヒ腹水癌(マウス)の核学的研究「動物学雑誌」63 : 22-25, (1954).
- No. 55. 吉田俊秀. マウスにおける滝沢ヒノン癌細胞の核学的研究. 「動物学雑誌」63 : 18-21, (1954).
- No. 56. 酒井寛一, 鈴木保男. 他殖性植物の採種における対立遺伝子の機会的変動と雑種強勢の喪失. 「育種学雑誌」3(2) 55-58, (1953).
- No. 57. Motoo KIMURA; Process leading to Quasi-fixation of genes in natural populations due to random fluctuation of selection intensities. Genetics, 39. (3) : 280-295, (1954).
- No. 58. Tosihide H. YOSIDA; Tetraploid chromosome constitution characteristic to the tumor cells of Takeda sarcoma. Gann 45 : 9-15, (1954).
- No. 59. Kan-Ichi SAKAI; Studies on competition in plants II. Competition between diploid and autotetraploid plants of barley. Jour. Genet, (印刷中)
- No. 60. Tosihide H. YOSIDA; Karyological study of the Takizawa quinone-carcinoma and the Ehrlich ascites carcinoma developing in mice. Cytologia, (印刷中)
- No. 61. Taku KOMAI; Composition of wild populations in the Lycaenid butterfly *Neozephyrus taxila*. Amer. Nat., 87 (833) : 87-95, (1953).
- No. 62. Taku KOMAI, Ken-Ichi KISHIMOTO and Yasunosuke OZAKI; Genetic studies of human microcephaly (Preliminary report). Proc. Jap. Acad., 29 (5) : 220-223, (1953).
- No. 63. Taku KOMAI, Ken-Ichi KISHIMOTO and Yasunosuke OZAKI; Genetic study of microcephaly based on Japanese material. Amer. Jour. Human Genet. (印刷中)
- No. 64. Kanji GOTOH; Genetic studies on eggplant III. Jap. J. Genet, (印刷中)

- No. 65. 後藤寛治. ジニアに於ける八重咲性の遺伝. 「育種学雑誌」4(1): 1-4, (1954).
- No. 66. Seiji MATSUMURA; Chromosome analysis of the Dinkel genome in the offspring of a pentaploid wheat hybrid. V. Gigas-plants in the offspring of nullisomic dwarfs and analysis of their additional chromosome pair. Cytologia, (印刷中)
- No. 67. Mitsuo TSUJITA, Kyozi WATANABE and Seizo TSUDA; Electron-microscopical studies on the inner structure of Paramecium caudatum by the ultra-thin sections. Cytologia, (印刷中)
- No. 69. 松井千秋. *Pseudomonas solanacearum* ヴァイロスの電子顕微鏡的観察. 「ウイルス誌」4(2): 128-130, (1954).
- No. 70. Tsuguo TATEOKA; Karyotaxonomy in Poaceae II. Somatic chromosomes of some species. Cytologia, (印刷中)
- No. 71. Kōzō HAYASHI; Überl ick der Arbeiten über Anthocyanen in Japan, unter besondere Berücksichtigung der natürlichen Pflanzenfarben. Die "Pharmazie": (印刷中)
- No. 72. Kan-Ichi SAKAI and Yasuo SUZUKI; Studies on competition in plants III. Competition and Spacing in one dimension. Jap. Jour. Genet., (印刷中)
- No. 73. Kan-Ichi SAKAI and Kanji GOTOH; Studies on competition in plants IV. Competitive ability of F<sub>1</sub> hybrids in barley. Jap. Jour. Genet., (印刷中)
- No. 74. Seiji MATSUMURA; Nullisomic dwarfs and their gigas-plants in the offspring of a pentaploid wheat hybrid, (印刷中)
- No. 75. Saburo NAWA and Toshifumi TAIRA; Pterins found in Silkworms and Drosophila. Proc. Jap. Acad., Vol. 30. No. 7: 632-635, (1954).
- No. 76. 辻田光雄. 黄色致死蚕に関する研究 II. (印刷中)
- No. 77. Toshihide H. YOSIDA; Karyological study on tumor cells of the MY-mouse carcinoma and the MY-mouse sarcoma, with regard to the characteristic chromosome constitution of the tumor stem-cells. Ann. Zool. (印刷中)
- No. 78. Tosiide H. YOSIDA; Mitotic abnormalities in tumor cells of rats and mice and their significance to growth of the tumor. Cytologia, (印刷中)
- No. 79. Tosiide H. YOSIDA; Effects of colchicine and nitrogen-mustard on the Yoshida sarcoma cells. Gann, (印刷中)
- No. 80. Tosiide H. YOSIDA and Takaaki Ishihara; Some observations on a non-transplantable ascites tumor developing in a inbred mouse. Jap. Jour. Genet., (印刷中)

- No. 81. 辻田光雄, 坂口文吾. 黄色致死蚕の遺伝生化学的研究 (I) 黄色致死系統のプテリンに就て. 「遺伝学雑誌」, (印刷中)
- No. 82. 辻田光雄. 家蚕の *E* 遺伝子群中の  $E^H$  と  $F^{KP}$  との交叉について. 「遺伝学雑誌」, (印刷中)
- No. 83. 辻田光雄, 松井千秋, 津田誠三, 吉沢攻. *Pseudomonas solanacearum* E. F. Smith の諸原性に関する研究. I. 溶原株 T-1200 について. 「ウイルス誌」, (印刷中)



## Ⅶ 開所式に拾う

メタセコイヤに思う

小野久雄

創立5周年記念式の受付もやつとのことで終り、何か解放された様な気持でカメラを片手に跳び出した。

戸外は新鮮な空気が漲がり、木々の緑が眼に沁みる様に美しい。思わず深呼吸したくなる様な快よさに誘われた僕は、芝生に横になり澄んだ空を眺め、所長の天気予報の正確さに感心しながら、しばらくをうとうとと過ごした。すると近くで「メタセコイヤが大きくなつたね」と云う話し声が聞こえた。

数年前小さなクリスマスツリーを思わせる様な可愛い苗木が本館の南側に植えられた。これが「生ける化石植物」と云われるメタセコイヤだ。生長が早いとは聞いていたが、本当かなと僕は久し振りに此の木の近くについて見た。確かに発育が早いようだ。しかし僕にはこの事より、幾千万年の昔から今尚現存して大地にしつかりと根を張り、幹も折れよとばかり吹きつける寒風にも耐え、何の穢れも知らぬかの如く、真直ぐ伸び行く姿に何か不思議な力を感じずにはいられなかつた。

顧みれば、5年前の研究所以は破損した窓硝子と重傷に喘ぐ本館が横たわつているに過ぎなかつた。悪条件下に、我々は人類の幸福と繁栄に貢献せんとする高い理念の下に協力して起ち上がった。そして来る日も来る日もわずかな人員で厚い埃に埋れた室の掃除に励んだ。窓から吹き込む風を避けながら顕微鏡と取組む研究員の姿、坂下のお寺まで飲料水を汲みに行く人々の姿、これこそ永遠に消えることなき尊い人間の姿ではなかつたろうか。辿り来た道は遠く険しかつた。しかし我々は今日茲に5周年記念式を迎える事ができた。この喜びを誰が知るだろう。我々だけが知る大きな喜びと云つても過言ではない。さあ過去を開拓した忍耐と自信とをもつて未来の開拓に新たな意欲を燃やそうではないか。やがて小さな苗木は天にもとどかんばかりに生長するに違いない。我々もメタセコイヤに負けずに1日1日を生長する様努力しよう。5周年記念日にこんな事を思いながら僕はこの木をカメラにおさめた。

6月1日、この日は研究所の開所式を兼ねた5周年式という、あまり類例のない式典の行われる日である。前日の小雨に洗われた研究所が初夏第1日の旭光を斜にうけて緑の芝生に浮き出した姿はいかにもすがすがしい感じである。やがて晴れやかな所員の顔にまじって爽爽と登庁された小鶴所長も田中、駒井両先生も緊張のうちにも明るい微笑をたたえておられる。時折行き合う竹中さんの相好を崩したエビス顔も印象深い。日本遺伝学会十数年の宿願が漸く成つて、これら諸先生の産婆役で産れ出た遺伝学研究所が、今日生誕5年の祝をしようというのであるから、所員一同の喜びもさることながら、老先生方の胸中には定めし無量の感慨が秘められているであろう。

日もやがて中天に近づく頃、国の各地からこの遠隔の三島までのはるばるお出かけいただいた数百の方々を私たちは心からの喜びと感謝をもつてお迎えしたのである。やがて式は型の如く始まつて型の如く終り、次いで午餐会、所内見学という順序で進められ、午後の4時すぎに万端滞りなく幕を閉じたのであるが、その間私には場内連絡と見学の案内という役目が与えられていたので、終日あたふたと駆けまわるのみで食事さえおちおち喉を通らぬ始末、おまけにはじめてお目にかかるお客様が大部分で正直のところ全く取りつくシマもなく、またシマもないといった調子で、5周年式点描などという洒落れた芸当は思いもよらず、ただそこはかたなく1日の行事も終りを告げたわけである。夕刻、諸先生のお伴をして酒井さんと私とが、遠方へ帰えられる数名の方々を三島駅までお送りしたあとで漸く我にかえつたという筋書きだけである。

さて宿舎に帰つて手足を伸ばし、ふと今日の1日を振り返つたとき、重い責任を脊負つて壇上に立つた所長の老躯が最も印象深く私の脳裏に刻まれているのがついた。想えば私がこれまでに巡り合つた開所式はこれで三度目であり、同じようなそれぞれの所長の姿を三たび壇上に見た。こういうといかにも私が研究所の渡り鳥みたいに聞えるが、本当のことだからどうにもならない。

私が草鞋を脱いだ最初の研究所は創立十余年で閉所し、次のは創立5周年を間近に控えて遂に官制廃止という憂き目を見た。これらはいずれも敗戦というわが国未曾有の出来事によるものとは言え、夢多き若き研究者には余りにも悲惨な体験であり、謹厳寡黙な老所長がたには余りにも痛々しいことであつた。これにまつわる喜びと悲しみの数々を想い出でつつ、今日目出たく創立5周年を迎える

こののできた小館所長の姿を泌々と壇上に迎ぐとともに、またその所懐にも一入深い感慨をもつて耳を傾けたのであつた。

私は昨年夏赴任したばかりで、正直のところ研究所の今日までの歩みについては殆んど何も知らなかつた。今日の所長の演述ではじめて設立以来のことがはつきり分つた。研究所が5才の春を迎えて世間へ出してもどうにか辱しくなくなつた頃合を見計らつて、その誕生を報ずるとともに成年の姿を一般に披露して、将来の発展に対して学界と社会の援助を固く約束しようとする所長の慎重な心遣いを汲みとることができた。

研究所がその態勢を確立して遺憾なくその機能を發揮し得るまでには凡そ10年の歳月を要するといわれる。今日すでにその半ばを過ぎ、いよいよその内容の充実に邁進すべき秋に至つている。私たちはこの意義深い5周年の日を契機として緊密一番新となる決意を以て将来に臨まなければならない。まことに当然なこの事を私は私なりに深く吾が方寸に刻んだのであつた。

## 5周年におもう

駒井卓

当研究所の5周年を迎えて、おもうことは色々ある。なかにも強調したいのは、この種の研究所が日本の科学の進歩のために、頗る望ましいということである。

日本人が科学の研究をするのに多くのハンデキャップがある。殊に語学のそれが最も甚だしい。自国語を読み書きするのに、日本人（中国人も大体そうだと思うが）ほど、時間と労力をかける国民は少ないだろう。その上なおも外国語が自国語と全く別系統のものだから、それを一通り習得するのも容易の事ではない。ふつうの経歴のものには先ず不可能に近い。こんなハンデキャップがあるので、学校で学ぶ事からの内容は外国に比べると、遙かに少ない。むしろ表向きは外国に負けなくらいでも、上すべりで身につくものが少ないという方が當っているだろう。

こんなことで1人前の研究者になる年齢は外国人に比べて上になつている。一応1人前となつても実質的には、色々足りないところのあるものが多い。それに学校の教師とか工場の技師などになると、色々の仕事をやらされる。大学などでも教えることのために教師の取られる時間が前より多くなつたし、世話をしなければならぬ学生の数も多くなつた。また会議や雑用も、昔に比べてふえたようだ。その上私生活もひどく苦しくなつている。こう悪條件が揃つては、大学の先生の研究能力に大した期待を寄せることは無理のようだ。

一方学問の方はおかまいなしに前進する。ついて行くことさえ息切れがするくらいだ。こんな有様では、日本の科学の前途は誠に心細い。日本はこの後どうしても科学技術によらなければやつてゆけないというのが常識だ。この点だけでも、せめて東アジアの中で先進国の位置を保っていなければならない。それにはどこかで高い水準の研究をやっていることがぜひ必要だ。上のような事情によつて、それが大学などにのみ任かせておけないから、どうしてもこの研究所のようなものが必要になつてくるのである。

私どもは永年大学に勤め、その後でこの研究所の席を汚しているものだが、4カ年余の経験は、何より研究にほとんど専心になれることの恩恵を感じるのである。もちろん新設に伴う不便不足はある。しかし一ばん有難いのは時間のあることである。それから講義をしたり指導をしたりする責任のないことである。日本の現状では、これ以上良い条件は一寸望みがたい。これで相当の仕事ができなければ、自分の力の足りないためとあきらめるほかはない。また恐らくこの後ここから良い研究が生まれることが期待できるとおもふ。

良い収穫を望むなら、良い土地に苗を植えて充分の肥料を与えなければならぬし、多量の乳をしほりたいなら、牛に充分の飼料を与え、その他の条件を良くしなければならぬように、科学者にも相当の境遇を与えなければ、良い研究成果の望めないのは当然である。日本の科学技術の水準を、先進国に劣らない程度に保とうと望むなら、当所のような研究所を、他の科学についても設定することが望ましい。

次にこれを大学附属などとしないう方がよいわけは、1つは学閥とか出身校とかいうことに捉われないで、本人の能力本位で、しかも広い範囲から人を得られることである。次に種々違った経歴専門の人々の力を集め、相助け相補なうことができる。その人々も遺伝学という点では共通だから、協力するのにさほど骨が折れない。遺伝学のような総合科学では、このような形式でないと、お互いに進歩向上はむずかしいし、気の利いた研究成果は望みがたい。

以上は私の経験から偽らない感想である。元より不足をいえば色々あるが、ただ方向としては、こういった制度が確かによいといえるし、また日本の現状で望ましいというより、必要なものだと思う。

## 五度目の田植え

酒井寛一

その日は丁度素晴らしい秋日和の七五三の当日で、三島のせまい大通りは、人の

波でうずまっていた。その雑踏を縫うようにして、何か夢みるような気持ちで研究所についたのは、昭和24年の11月のことである。何もなかつた、がらんとした人気のない室の中に1組の机と椅子があるほかは。ここを圃場にしようと所長の指した広い区割された土地には、先住者の作り残したマイコンが一隅に青く茂っているだけで、赤土と石礫と、そして建物をこわした木片や塵芥の連続だった。

春がきて雑草も生えなかつた。クワを入れると、ころがり出てくる岩のような未風化の土塊は、その下にある岩磐の近さを思わせた。私はそのとき、何という理由もなく、無性にイネを植えたくなつた。もちろん水田などはないので、僅かの籾を小さい壺にまいた。このとき既に畑ではトウガラシやナスをうえて研究材料の準備にぬかりはなかつたが、このイネだけは何の目的もなかつた。

第2回目の春が訪れたとき、どうしても水田がほしいと思つた。たまたま城内に借地の話が進められて、同所の6畝ほどのコムギ畑を研究田にする計画が立てられた。こうして着々と準備が進められても、まだ昭和26年には田植えをするにはいたらなかつた。だからやはり2度目のイネの壺作りが繰返された。

しかしその翌年からは、壺はポットに代つて、交配用と採種用のイネが植わるようになり、新しい水田には1本植のイネが盛に分蘗をするようになった。こうして、昭和25年の春以来、壺を含めて今年は5度目の田植えである。

石の上にすわらねばならない3年は既に過ぎた。しかも恥しいことには、自ら満足できるような仕事はまだできていない。だから、大きなことをいえる柄ではないことは知つているが、しかし、それにも拘らず、ここで私の夢を物語りたい衝動に駆られる。

今まで、私達の学界は、すぐれた僅少の先輩科学者たちを除けば、一般に模倣研究が主体をなしてきたように思う。社会も安易な気持ちで、模倣研究を容認し、ときには奨励してきたようである。実際、国家としても、目前の功利を考えれば、器用な模倣の方が、不器用な独創よりも、より手軽により多くの利益をもたらすことは明らかである。こういう一般的な考え方が、科学研究に直接関係しない人達にも、そして更には、研究者自体の中にも、多かれ少かれ浸透してきているように思われる。そしてときには、逸早く模倣の一番乗りの人達が、学問の開拓者として歓迎され、尊敬される結果さえ生んだような気がする。

これもうなずけないではない。事実そのような、何らかの意味ですぐれた才能、たとえば理解力とか、器用さとか、応用能力とかにおいてすぐれた人達が、我国の文化の発展に寄与し、産業の興隆にあずかつて、著しい力があつたし、今後も

またそうであろうということは容易に考えることができる。

しかし問題は別の所に発生する。それは、そのような科学界の実態が、これからの若い青年研究者大衆に与える影響である。若い研究者達に、外国科学の模倣追隨も1つの研究方法であるというような考え方を与えたら、これは問題である。

「清貧に甘んじて」の研究が、科学者の態度であるといわれた時代も、そう遠くはなかつた。もちろん、この言葉を額面通りに受けとられては、科学者たるもの、この困難な経済社会に生きることさえできなくなる。しかし、もし一般の大衆社会が外国文化の模倣追隨から生れる安直な利益を歓迎して、研究者大衆を模倣研究に誘惑するのであつたら、その社会の風潮に抗して、敢然と、精神的清貧に甘んじる青年科学者があつてもよいと思う。

日本の科学は今後勇敢に独創に向つて前進せねばならぬ。この研究所が、その最高の目標とすべきものも、いうまでもなく、世界に誇り得るような独創的研究を遂行することであろう。私達は自分の能力の限界を知つてはいる。しかし、かくあるべきであるという目標を心ひそかに貯えること位は許されてよいであろう。

社会の庇護の下に存在せねばならぬ、本研究所が、ほんとうにその社会に報いる道は、上のような夢に向つて、真剣に誠実に精進すること以外にはないようによさ思えるのである。

## 5 周年の断想

田 中 義 麿

この研究所が創立されてからもう満5年になるとは早いものだ。しかし50年、100年の歴史を有する研究所が数あることを思えば、創立5周年を祝するというようなことは、開所式を兼ねてという含みがなければ凡そ無意味なことであつたろう。

遺伝学研究所という名の研究機関は現在のところ日本には1つしかない。また国立ということになると外国にもごく少い。だから稀少価値から言えば国立遺伝学研究所は大したものである。もつとも外国には民間にりつばな遺伝学研究所があり、国立の必要がないからないのであつて、国立の研究所を持つているからといつてそれほど日本の自慢にはならない。

古い歴史を有する研究所にはドッシリとした底力がある。長年の間に蓄積された図書、諸設備、研究材料、研究陣容等、等、駆け出しの研究所では及びもつか

ない旧家の貫録を備えている。とはいうものの新しい研究所にもまた長所がないではない。ここはあらゆる点でこぼこだらけではあるが、そこに未完成のハツラツさがある。伝統や因習に束縛されない自由さがある。研究のテーマにしても研究の態度にしても、各研究者の思うがままに任されている。機械その他の設備は不十分であるが、その代りすべてが最新式である。研究陣は貧弱であるが、その中には派閥もなければ対立的な感情もない。若い研究所はこれらの長所を生かし、年を重ねると共にその短所を埋めて行かなければならない。

研究のテーマは研究費、補助者の有無、設備の制約、文献閲覧の能否等を考慮して決定されなければならないが、できるなら独創的な構想の下に、遺伝学の主流にタッチしたものでありたい。これは特に若い研究者に対して希望するところである。単なる“1例報告”はいわゆる routine work であつて、学会での研究発表の材料にはなつても第1巻的な仕事ということではできない。

他の科学がそうであるように、遺伝学もまた種々なる科学の分派とのつながりを持つ。当研究所としては現在の5つの研究部門の外に放射線遺伝部、人類遺伝部、病理遺伝部、それに応用遺伝部を動物と植物との2部分けるためにもう1部を新設すれば、最初の計画は一応完成を見るわけであるが、それだけでは充分でない。研究所内のどの部かに動物学者、植物学者、人類学者、分類学者、生理学者、解剖学者、病理学者、細菌学者、物理学者が入つて来ることが望ましい。アメリカにある何十という生物関係の研究所のうち、狭い範囲の specialists だけから成つている所はいずれも萎縮して振わず、反対に種々の分野の専門家を包容している所は活潑に研究の成績を挙げているそうであるが、げにさもありませんと思われる。

現在のように研究所に雑誌のバックナンバーもなく、蔵書も貧弱、器具、機械、標本等も不十分で、事ある毎に東京まで走らなければならぬようでは、三島という土地は不便この上もないが、何年か後、これらの欠陥が埋められ、あらゆる面で研究所が自給自足できるようになつたとすれば、研究所の所在地として三島ほど優れた立地条件を備えた処はけだしまれであろう。吾々は吾々の総力を結集して1日も早くその日の来るよう努力しなければならぬ。

### 懇親会の模様

吉田俊秀

開所式のことについては大先生方の記事があろうから、私は懇親会特に私の出席した第3会場(トキワ)の模様を思い出すままに綴つてみよう。

ここに集つた面々は現在遺伝学の第1線に立つて活躍している者ばかり。主な顔ぶれをあげて見ると、先ず現在の遺伝学会会長篠喜人博士を始めとし、南は広島大学の下斗米教授、岡山大学からは猪野、大倉の両博士、京都大学からは西山、山下の両博士、東京からは盛永、森脇、平塚、湯浅、山崎の諸博士、札幌からは牧野博士、その他全部で23名が御出席下さつた。地元の遺伝研からは竹中、辻田の両博士、古里さん及び小生の4名が接待役として列席した。

先ず竹中博士の所長に代つての御挨拶、会長におされて最年長者の盛永博士の応答の御挨拶等が交され、折からぞくぞく入つてきた三島芸者の酌により宴会の幕は切つて落された。

出し物としては芸者の唄とおどり、そしてやんわりと舞台に表われたのは有能の士、山下孝介博士、かねて噂は聞いていたものの、こんなに有能とは。兎に角芸者と手をつないで躍るだけでも得をする人だ。次に表われたのは岡山代表の猪野俊平博士、トックリをもつてトントントンカラリの替え唄をうたい一座は腹をかかえて笑う。地元からは竹中博士の出演、足が御不自由なのにダンスをやつてみせて下さつたが、これは当座きつての見物。けだし奉仕の心の表われとして地元の吾々の感激は一潮。その他日頃は勤直の士が唄におどりに時の立つのを忘れ、愉快な宴会は午後8時半に閉会となり、ここに開所式の全ての行事は無事終了をとげたわけである。

大がいの方は夜行列車で帰えられたが、篠遠博士、盛永博士、牧野博士等は常宿の三芳館に御1泊。盛永博士は明朝の6時の列車で帰えらねばならぬ。それ故5時半には起きねばならぬが、さてどうしたものだろうと思案しておられた所、牧野博士が「私は予定した時間には間違いなく起きることができますから私が責任をもつておこしましょう」との議により、牧野博士におまかせすることになった。成程昨夜の言の如く、朝早く起こしてはくれたものの、時計をみたら何と4時半、盛永博士は、ねむい眼をこすりながら、それからはねむるわけにはゆかず、テクテクと歩いて三島駅まで行かれたそうです。牧野博士のいわく「時計の針を1時間見間違つていた——」。これは三芳館でひろつたこぼれ話の一しづく。

思いたすまま

竹 中 要

A. 三 島 へ

苦しい想出、悲しい想出、飢しい想出の連続する3年近い三島通いも終つて、昭和24年10月29日は晴れた気持で三島入りときまつた。早朝から差当つて入用の



机や椅子を積んだトラックをだして、なけなしの研究所の金を工面して買入れたパッカードに塚本、門脇の両君と乗って箱根越えとしやれたわけである。途中いろんな用事を済ましている内に、小田原へ着いたときには最早落ちやすい秋の日はとつぷりと暮れてしまっていた。お腹もすくし、林檎と焼酒1瓶を買求めた。なんと東京を出るときあれほどやかましく云つておいたのに、小田原に着いた時にはガソリンがもう1軒も走れん位に減つてしまっていた。秋山運転手はほうほうの態で、闇のガソリンを探して回る。探している内に自動車動かなくなりばせんかと乗っている者も気が気でない。やつと電灯もない暗い路地に闇ガソリンを見付けて、ホットした。

秋も中ば過ぎ箱根の夜は寒い。ガスをついて急速度で登つていく。今は古ぼけたパッカードだが、その頃日本人の乗る車では最上等、先程までメソをかいていた秋山君は腕の見せどころと、得意になつて速力をだす。上からはときどき進駐軍の車とトラックとがガスの間から突然現われてきて、その度毎にヒヤッとする。余り寒いので門脇君持参の布団を拵けてもぐり込み、焼酒をちびちびやりながら箱根を越えた。

研究所へ着いたのは夜も11時すぎ、10数人の若い人達に迎えられて、先ず本部が三島に到着したわけである。三島組の心盡しのお握りを食べて、修理中の宿舎に入った。朝早くでた荷物のトラックはまだ着いていなかった。(翌日、事故を起しておくれたことがわかつた)。

翌朝は早速顔を洗う水がない。若い人達の努力によつて下の長泉寺からの1ヵ月余りの水汲みが初まつた。それから後はガラン洞の大部屋の掃除と水汲みとが当分の仕事であつた。畑は石の様に固い荒地であり、建物は盗賊の棲家のように塵と蜘蛛の巣だらけであつた。

今日の盛大なる5周年記念を見て、うたた感慨にたえぬものがある。

## B. 種子なし西瓜とダーリア

暖かい三島の冬ごもりは伊豆一帯の見学に終つた。翌年は春早々から種子まきにかかつたわけであるが、何といつても畑の土を作ることが先決問題であつて、研究は予備実験の範囲をでない。若い血の気の多い諸君は歯ぎしりするが、何ともしかたがない。そこで、木原生研創作の種子なし西瓜と小生蒐集のダーリアを蒔えた。

6月になると数十品種のダーリアが見事に開いた。先ず三島の人々を驚ろかし、あちこちの新聞は大きく書きたてた。クスグッタイのは小生独りである。何も大

して珍しいものではなく、大輪、中輪、ボンボンとも手入れがよければ立派な花をつける。もつとも此の頃は人々の気持ちがやつと落ち着きはじめて、花に関心を持つ気分がでたばかりであるから、永い間殺風景な生活をした人々には驚ろきであつたかもしれない。時機に投じたわけである。皆様に喜んでもらつたのは嬉しかつたが、何か研究をしているように思われたのにはちよつと困つた。その後翌る年も、その翌る年もダーリアは晩春から晩秋にかけて人気ものであつたが、1年1年品種は減るし、茎も花も小さくなる、これは研究所発展の逆比例パラメーターである。というのは研究がようやく地に着くようになり、研究者が手一杯に活動するようになると、観賞用のは第1番におろそかにされる。従つて手入れが後手後手と回つて、後手に回される位ならまだしも、放りばなしとなる。しかも悪(価)花は良花を駆逐して、年々良い品種は消えてしまい、今日では残つたものが20品種もあろうか。先日もある新聞社の記者がダーリアを撮りにきて、ダーリアの研究について聞いたから、内訳話をした。これは国立の研究所ができなかつたら、致し方ないから私は、たくさんの子供達を連れて花屋でも初めようかと思つて、ダーリアを蒐めていたのである。幸い研究所ができたから、これをもつて三島に来たわけである。初めの内は手間もあつたから、皆に可愛がられたが、昨今では研究が忙しいから、継子あつかいにされて、しょんぼりしている。

種子なし西瓜も昭和25年には大変可愛がられた。新しい畑の改良の意味もあつて、数量もたくさん作つたし、肥料もたくさんやつた。7月になると中食のとき、先ず、おいしい西瓜がだされる。食生活のまだ悪いときであつたから、初めの内は喜んで食べた。最中になると毎日、しかもその午後3時頃になると、ガラン洞の窠々に「西瓜を食いにこい」とどなつて回る。美味しいの、まずいの、大きい小さいの、赤いの、黄色の、色々である。ダーリアと違って少しは研究面も含んでいるので、内部の構造、種子の状態、成熟度等を調べなければならない。しかも種子有り、種子無し、4倍体の3組が各品種に亘るわけであるから、全体量は大変なものである。1週間もつづくと20人ばかりの少人数では始末がつかない。皆も食いあきてしまつて、「今日もまた西瓜か」というようになってしまつた。ところが年がたつにつれて、西瓜も虐待されだして数量も少なくなるし、手入れも行きとどかなくなつた。それにもまして研究所内の実働人数が非常に増えて4倍以上にもなつたので、西瓜にありつく機会は珍しくなつてしまつた。これもダーリアと同じ道をたどつて研究所の発展に逆比例する。この2つとも研究所の先ず第1の功労者ではあるのだが。

去る6月1日挙行された創立五周年記念式典に出席した際、いくつかの印象的なことがあつた。そのうちでもとくに私に感銘を与えたのは所長の式辞であつた。式辞といつてもその内容のことである。先ず遺伝学の重要性から説き、国立遺伝学研究所設立に至る経緯、幾多の難関を突破して、やつと昭和24年6月1日法律が制定されて、本研究所が設置されるに至つた。爾來滿5年間、只管研究所が創立の事業に終始してきた顛末を審に説き、建物、施設、圃場の整備、部門の増設、不十分乍らスタッフの拡充、諸外国の遺伝学者の当研究所に対する関心、研究の推進、研究の発表法など細かいところまで説明され、終りに戦後における日本の困難な財政の下に、これまでに切り開いてきた道は決して坦々たるものではなく、否むしろ切り開くには余りに抵抗の多い茨の道であつた。しかしこの道もここまで拓かれてきたことは事実であり、この基礎の上に一層本格的な研究態勢をとりうるようになったのであると述懐されているあたりは、聞く者をして感涙を覚えしめるものがあつた。

もう一つ式辞を朗読されるため壇上に立たれた所長は、いつになくやや固くなつておられたように見うけられたのも印象に残るものがある。私達は平常、講演に、テーブルスピーチに常に御得意の諧謔と諷刺とを交え乍ら弁舌さわやかな御姿を見做れている。しかしその日の先生には多少意外な感をいただいたのは、私のみではなかつたようである。しかしこれには理由が考えられないでもない。創立以来現在の研究所にまで到達したのは、母体たる文部省の配慮によるはいうまでもない。また関係外部の方々の援助や所内の諸先生の盡力もさること乍ら、只管研究所の将来を思い、その基礎固めに過去5年間心魂を傾けてこられた所長としては、恐らく誰にも増してこの日は感慨無量のものがあつたろうと思われる。その感激が自ら先生をしてやや緊張せしめたのではなからうかとひそかに想像した次第であつた。

過ぐる昭和25年3月1日未明私は東京を出発して、未だ霜柱たつ箱根の山道をトラックで荷物と共にここに引越し、その翌日より今の酒井研究室の一隅に据えられた机に一人ポツネンと座り、さて何から手をつけたものかと考えたのもついでこの間のことのような気がする。先づ農場では桑園整地、桑樹の植付に数十日余を費し、実験室では実験の道具や設備を少しずつ整え乍ら仕事にかかり、実験材

料のカイロを飼うため桑樹を求めて近傍の岡を越え、小川を渡りやつと探しあて、桑葉の購入、桑園借入の契約などに苦心し、あるときは函南村の桑園まで摘桑のため、竹倉の鉄道トンネルを列車通過の合間を見て、坂口君と共に危険を犯して走つたのは、同年の春から秋にかけてであつた。その頃に比べると現在では、構内桑園も見違えるばかりに立派になり、実験材料蚕の飼育には事欠かぬだけ十分なものになった。27年秋には電子顕微鏡室の完備、28年度には生化学実験室、低温室などが整備され、それぞれの手技体得に研究室の人と共に夢中で1年ばかりを過したことが走馬燈のように追憶される。

所内におけるその他の施設、設備も相当整い、着任当時に比べると隔世の感を禁じえない。こういう事情の下に、延び延びになつていた開所式が5周年記念式と兼ねて行われたのは、真に時機に適したものであつた。式典に参加したO課長も『遺伝研とはどんなところにあり、どんな施設、設備をもつたところかと思つていたが、場所もよいし、また短年月の間によくこれだけ立派なものにした』と感心しておられた。これはあながちこの人だけの単なる御世辞ではなく、この式典に参加された大多数の方々の所感であつたと思われる。

5周年記念式典も無事すんで、これで研究所も真の発足をしたことになる。これから仕事の上で大いに発展すべき段階に入つたわけである。それだけ一層所員として責任の重大なるを感ぜざるをえないのである。

## 裏ばなし

乙 藤 寛 一

○ 5周年記念式の際に頒布する記念品については、何がよいかと研究所の幹部で大分頭を捻つた訳であるが、予算の都合もあつて、結局は平凡な「風呂敷」ということになつた。しかしこれを受けた人々の間では、案外評判がよかつたようである。ある親しい一人からの通信に依れば、「物そのものは通俗であるが、まあデザインと色で生きている」というのである。これを読んでチョツトよい気分になつた。実はデザインは川島理一郎画伯の小さな同型をもとにして、その道に堪能な吾等の小熊所長が自身で、型紙に画筆を揮われたものであり、色も所長自から選択されたものであることを披露しておく。

○ 夜の懇親会を4カ所に分けたことについては、その部分の記事にも出ていふことと思うが、市内に大きな会場が無いことや、一定の時間内にとにかく大勢の宴会を終了させることのエチケットなどから、誠に已むを得なかつた。4つの群の分け方にも、大いに智慧を絞つた積りである。会場によつて待遇を異にす

る意図は、決して無かつたことを諒解して頂きたい。

○ 粗末ではあつたが、昼の祝宴と夜の懇親会とを重ねて行つたことについて、来賓の1人で親密な友人である某研究所の部長さんは、「遺伝研にはよくもこんなに費用がありますね」と軽く皮肉られた。「昼のは研究所自体の経費で、夜のは財団の遺伝学普及会で負担して」と答えたことである。何も妙な支出のやり方は致しません、堂々たるものでね、と心の中で、かすかに威張りたい様な気持であつた。

---

昭和29年8月25日印刷

國立遺傳學研究所

昭和29年8月31日發行

創立5周年

[非賣品]

發行者 竹 中 要

靜岡縣三島市谷田1,111番地

印刷所 サイエンス社印刷部

東京都豊島區目白町3丁目3,573番地

---

發行所 財團法人遺傳學普及會

靜岡縣三島市谷田1,111番地

---

